国立大学法人お茶の水女子大学
ジェンダー研究所

2023年度 事業報告書

Institute for Gender Studies Ochanomizu University

ジェンダー研究所 2023 年度事業報告書によせて

ジェンダー研究所長 戸谷 陽子

お茶の水女子大学ジェンダー研究所 2023 年度の事業内容および活動の報告をお届けします。 2023 年 5 月、新型コロナ感染症の分類が「5 類感染症」に移行し、3 年間にわたる社会生活上のさまざまな制限が緩和され、キャンパスにも活気がもどってきました。本年度も、所長以下、専任教員、研究員、研究系および事務系のスタッフが協力して研究活動および研究交流を進め、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム・IGS セミナー等の開催、学術雑誌の刊行、教育プログラムの実施、国際的学術ネットワークの構築、研究成果の発信と社会還元といった事業において、いっそうの成果を上げることができました。

具体的には、国際シンポジウム1件、IGSセミナー6件、研究会1件を主催したほか、共催シンポジウム2件、共催研究会1件、後援イベント1件を開催しました。また、IGS刊行の学術ジャーナル『ジェンダー研究』では「リプロダクティブ・ジャスティス:妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」を特集テーマとしました。2022年米国最高裁において、1973年のロー判決が覆され、女性の身体・再生産に関する自己決定権が大きく揺らぐ中で議論を整理・展開し、時宜を得たテーマであったと好評をいただいています。

新型コロナ感染症による活動制限が大幅に緩和されたことから、海外との交流も着実に規模を拡大することができました。例年開催している AIT(アジア工科大学院大学)との交換ワークショップでは、先方から院生 2 名を受け入れ、本学からは過去最高の 11 名という数の院生を派遣して大きな成果を得ることができました。また、ノルウェー科学技術大学(NTNU)ジェンダー研究センターからは NTNU の研究者と院生が来日してフォーラムを開催、研究交流を行ったほか、本学からも院生を NTNU に派遣し、交換院生の指導助言にも力を入れています。ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 INTPART による共同プロジェクトは 9 月に終了しましたが、ノルウェー高等教育・技能局との事業に発展的に引き継がれ、交流を続けています。

当研究所の目的は「ジェンダーに関する総合的、国際的な研究および調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資する。」と規則に定めており、ジェンダー研究発展のための使命と責任を実感する次第です。これを基本理念として、今後も、確固とした学術的研究成果に支えられた、研究・教育その他の実践活動を推し進め、よりよき社会への還元と啓発を続けてゆきたいと考える次第です。日頃ジェンダー研究所の活動をご理解くださり、ご支援・ご協力をいただいておりますみなさまに心より御礼を申し上げますとともに、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

【目 次】

1.	ジェンダー研究所 2023 (令和 5) 年度事業概要
2.	研究プロジェクト
3.	国際シンポジウム・セミナー
	主催 IGS セミナー詳細 トランス排除を乗りこえるみんなのフェミニズム:連帯という実践へ/「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題: Lennon & Alsop "Gender Theory in Troubled Times"を読む/「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とその可能性/「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育:本質主義の克服に向けて/リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)の日本における政策課題と女性運動: 堕胎罪・優生保護法を中心に/今日の日本におけるトランスジェンダー研究
	主催研究会詳細 IGS 研究協力員研究報告会
	共催シンポジウム・研究会 『キャリアに活かす雇用関係論』を読んで・使う:ジェンダー視点を貫く授業 国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー (IMAGE) 分科会:仏・旧植民地出身移民女性 を中心化する予示的政治の空間:政治的連帯の隠された戦術 グローバル女性リーダー育成研究機構主催 女性学長国際シンポジウム アカデミアにおける女性のリーダーシップと DEI:女性学長が目指す21世紀に輝く大学教育
	後援イベント 日本フェミニスト経済学会 2023 年度大会:フェミニスト経済学とローカリティ――移動 の自由と生き方の幅

4.	国際研究ネットワーク	47
	1) 国際的な共同研究・研究交流	
	2)INTPART および UTFORSK プロジェクト	
	3)国内外招聘研究者一覧	
5.	若手研究者の育成	53
	1)AIT ワークショップ	
	2) 大学院における次世代研究者育成	
	3) 専任・特任教員担当講義	
6.	学術成果の発信	59
	1)学術雑誌『ジェンダー研究』	
	2) プロジェクト報告書 IGS Project Series	
7.	文献収集と公開・史料電子化・ウェブ発信	65
	1) 文献・資料の収集と公開	
	2)IGS 史料電子化プロジェクト	
	3) ウェブサイト等での情報発信	
8.	社会貢献	71
【資	料】	
1	構成メンバー	76
2	研究プロジェクトー覧	88
3	協力研究者一覧	89
	国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧	
	新規収蔵図書•資料	
6	電子化イベントー覧	
7	国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則	
8	『ジェンダー研究』編集方針・投稿規定	
9	ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー	107

1.

ジェンダー研究所 2023(令和 5)年度 事業概要

ジェンダー研究所概要 2023 年度事業概要

▶ジェンダー研究所概要-

学際的・先駆的なジェンダー研究と教育を推進する国際的な学術拠点

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、学際的かつ先駆的なジェンダー研究と若手研究者育成を推進する国際的な学術拠点である。その起源は、1975年にお茶の水女子大学に創設された「女性文化資料館」という研究機関である。ジェンダーやフェミニズムという言葉が一般的には全く知られていなかった時代から、歴代の所属研究者たちはジェンダー研究に取り組み、学内外・国内外の研究者らと積極的に研究交流を続けてきた。これら先人の研究者たちが培ってきたジェンダー研究の成果と国際的な学術ネットワークを礎に、現在、ジェンダー研究所では、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、若手研究者の育成、学術雑誌『ジェンダー研究』の編集・刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

[参照:本報告書103頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」]

ジェンダー研究所(Institute for Gender Studies (IGS)) の沿革と本学ジェンダー研究教育の動き

1875	東京女子師範学校(お茶の水女子大学の前身)開校
1949	お茶の水女子大学設立
1975	女性文化資料館設立
1986	女性文化研究センター設立
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
1996	ジェンダー研究センター(IGS)設立(国内大学初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設)
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
2003	21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア(F-GENS)」採択
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
2015	グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立

▶ジェンダー研究所 2023 年度事業概要

1. 研究プロジェクト

2023 年度は IGS 研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が 7 件、研究代表者または分担者として科研費を獲得しての研究プロジェクトが 7 件、そして海外の助成金によるプロジェクト 2 件の、計 16 件のプロジェクトが進められた。IGS 所属研究者らは、研究会やセミナー、国際シンポジウムを企画開催したほか、学会発表や論文投稿、書籍刊行、学術誌『ジェンダー研究』の編集刊行により成果発信にも努めた。[参照:本報告書 13 頁「研究プロジェクト」、59 頁「学術成果の発信」]

1)IGS 研究プロジェクト

	プロジェクト名	担当
1	「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	申
2	東アジアの越境的女性運動	大橋
3	資本と身体のジェンダー分析	大橋·足立·板井
4	性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析	嶽本
5	反公害/環境運動史におけるジェンダー分析	嶽本
6	グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー	本山
7	文学・芸術文化表象とジェンダー	戸谷

2)外部資金による研究プロジェクト

	財源	テーマなど	担当
1	科研費基盤 B	課題番号:23H03654 フェミニズム理論による新たな国家論の構築:ケア概念と安全保障概念の再構想 から[研究代表者:岡野八代(同志社大学)] (2023~2026 年度)	申本山
2	科研費基盤 B	課題番号:23H00888 日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究[研究代表者:定松文(恵泉女学園大学)] (2023~2025 年度)	大橋 平野
3	科研費基盤 B	課題番号:20H01468 新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー [研究代表者: 堀芳枝(早稲田大学)] (2020~2023 年度)	大橋 足立
4	科研費(国際共同研究強化B)	課題番号:21KK0033 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー [研究代表者:堀口正(大阪公立大学)] (2021~2024 年度)	大橋
5	科研費基盤 C	課題番号:19K12603 香港における移住女性の再生産労働力配置:「グローバル・シティ」のジェンダー 分析 (2019~2023 年度)	大橋
6	科研費基盤 C	課題番号:23K11676 「からゆきさん」にみる性・移動・再生産領域 (2023~2025 年度)	嶽本
7	科研費若手研究	課題番号:23K17134 日本による親ジェンダー外交の展開:安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析(2023~2027年度)	本山

3)海外の助成金によるプロジェクト

- ①ノルウェーリサーチカウンシル INTPART (戸谷・小玉・仙波・佐野) 2019 (H31) ~2023 (R5)
- ② / ルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku の UTFORSK (戸谷) 2021 年 8 月~2025 年 7 月

2. 国際シンポジウム等の開催

IGS 主催のシンポジウムやセミナーは、ジェンダー研究所所属研究者が、自身の研究成果と国際的な 人脈を生かして企画しており、研究所の研究・教育事業と有機的に連携している。

2023 年度は「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」をテーマに国際シンポジウムを開催した。国際関係論、文化人類学、難民研究という異なる領域のニュージーランドと日本の研究者が登壇して、複数の権力関係が交差する階層的なグローバル政治において、セクシュアリティと暴力をめぐる言説がどのようにネイションや人種の境界を管理し、家父長制や異性愛主義を強化しているのか討議した。シンポジウムの内容は、『ジェンダー研究』第 27 号(2024 年 7 月刊行予定)特集企画として掲載される予定である。

● 2023 年度 IGS 主催・共催・後援イベント

国際シンポジウム



グローバル政治の中のセクシュアリ ティと暴力 [本報告書 25 頁]

IGS 主催

IGS セミナー(学内限定)



トランス排除を乗りこえるみんなのフェミニズム:連帯という実践へ[本報告書28頁]

IGS セミナー(学内限定)



「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題~Lennon & Alsop "Gender Theory in Troubled Times"を読む~ [本報告書 31 頁]

IGS セミナー



「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とその可能性[本報告書32頁]

IGS セミナー



「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育:本質主義の克服に向けて「本報告書34頁〕

IGS セミナー(学内限定)



リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)の日本 における政策課題と女性運動:堕胎罪・ 優生保護法を中心に[本報告書 36 頁]

このほか、2023年度には IGS セミナー6件、研究会1件を主催し、共催シンポジウム・研究会を4件 開催した。うち 2024 年 1 月に開催した IGS セミナー (学内限定)「リプロダクティブ・ジャスティス (性・生殖・再生産をめぐる社会正義) の日本における政策課題と女性運動: 堕胎罪・優生保護法を中 心に」は、『ジェンダー研究』26号の特集テーマをさらに深く掘り下げて議論するために大学院生たち が主体となって企画したものである。また、同じく院生が中心となって7月に開催されたIGSセミナー (学内限定)「トランス排除を乗りこえるみんなのフェミニズム――連帯という実践へ――」や、1月に イギリスの研究者を招いて開催された国際セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化 と教育~本質主義の克服に向けて」など、インターセクショナルな視点にもとづくフェミニスト研究・ 実践を広く社会と共有しながら進めていくために、今年度も多くの重要なイベントを企画開催した。「参 照:本報告書23頁「国際シンポジウム・セミナー」]

■ 2023 年度 IGS 主催・共催・後援イベント



今日の日本におけるトランスジェンダ 一研究「本報告書 38 頁]

IGS 研究会



IGS 研究協力員研究報告会 [本報告書 40 頁]

IGS 共催

出版記念シンポジウム



『キャリアに活かす雇用関係論』を読ん で・使う:ジェンダー視点を貫く授業「本 報告書 42 頁]

IGS 共催

グローバル女性リーダー育成研究機構主催

IGS 後援

IGS 共催研究会



国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダ - (IMAGE) 分科会

仏・旧植民地出身移民女性を中心化す る予示的政治の空間:政治的連帯の隠 された戦術「本報告書 43 頁]

女性学長国際シンポジウム



アカデミアにおける女性のリーダーシ ップと DEI:女性学長が目指す 21 世紀 に輝く大学教育「本報告書44頁]

日本フェミニスト経済学 2023 年度大会



フェミニスト経済学とローカリティ:移 動の自由と生き方の幅 「本報告書 45 頁]

3. 国際研究ネットワーク

2023 年 3 月 31 日から、フランス・ローズ・ハートライン氏が日本学術振興会外国人特別研究員として来日し、IGS 研究協力員として日本におけるジェンダー多様性の実態、とりわけトランスジェンダーの経験についての研究課題に取り組んだ。その成果は 2024 年 2 月 20 日に IGS セミナー「今日の日本におけるトランスジェンダー研究」において報告した。この報告は対面で実施され、学内外から多くの研究者や市民が参加した。なおハートライン氏は、ノルウェー科学技術大学博士後期課程在籍中の 2019 年にノルウェーリサーチカウンシル INTPART のプロジェクトにおいて IGS での研究留学を経験しており、IGS の国際研究ネットワークのなかで意欲的に研究活動を結実させてきたといえる。

また 2023 年 8 月 21 日から、ハワイ大学マノア校教授のペトリス・フラワーズ教授が IGS 研究協力員として在籍した。フラワーズ教授は日本の国際外交とジェンダーについての研究課題に取り組み、2024年 3 月 5 日に実施された IGS 研究協力員研究報告会において「Doing Diplomacy: Gender, Hierarchy, and Food in US-Japan Relations」と題して報告を行った。なおフラワーズ教授もまた 2007 年度に IGS 客員研究員として滞在している。国際的に活躍するジェンダー研究者が日本で学術研究や交流に取り組む際の、重要なネットワーク拠点としての IGS の存在意義を感じさせるといえよう。

2023 年 12 月 8 日には、IGS 国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」が開催され、ニュージーランド・ヴィクトリア大学のキャロル・ハリントン上級講師と、日本の神戸大学の工藤晴子准教授、成蹊大学の嶺崎寛子准教授が登壇して報告を行い、神戸大学の青山薫教授とともに活発な討議を行った。

このほか 2021 年度から大阪公立大学堀口正教授による国際共同研究プロジェクト「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」に大橋史恵 IGS 教員が参加し、中国社会科学院や華東師範大学の研究協力者とともに共同研究に取り組んでいる。

[参照:本報告書23頁「国際シンポジウム・セミナー」、47頁「国際研究ネットワーク」]

若手研究者の育成

AIT ワークショップ、博士前期課程ジェンダー社会科学専攻・博士後期課程ジェンダー学際研究専攻の指導

IGS 所属の特任講師が担当する大学院科目「国際社会ジェンダー論」は IGS の国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」の一環であるが、これはタイにあるアジア工科大学院大学(Asia Institute of Technology)との短期交換研修プログラムである。AIT からも博士前期課程の院生が来日し、お茶大院生と研究交流を行い、お茶大からも博士前期課程の院生たちがタイに派遣され、フィールドワークや、研究交流、帰国してからの AIT ワークショップ・プログラムの報告会、報告書作成などが組み込まれている。

また所属教員指導のもと、博士前期課程の6人がジェンダー社会科学専攻を修了し、ジェンダー学際研究専攻の博士後期課程の1人が学位を取得した。

[参照:本報告書53頁「若手研究者の育成」]



AIT ワークショップ・プログラムで来日したタイのアジア工科大学院 大学の院生による研修報告会(2023 年 7 月 25 日)。お茶の水女 子大学大学院ゼミの一環として開催された。

5. 学術雑誌『ジェンダー研究』刊行と学術成果発信

国際的学術雑誌『ジェンダー研究』第 26 号(2023 年 7 月刊行)は「リプロダクティブ・ジャスティス:妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」を特集した。本特集は、2022 年 12 月に開催したIGS 国際シンポジウムでの議論をもとにしている。特集論文として、Lisa C. Ikemoto 氏の論考「Reproductive Justice in the U.S. After Roe」を掲載した。そのほか、同シンポジウムでコメンテーターとして登壇した大橋由香子氏、高谷幸氏、宝月理恵氏による、日本におけるリプロダクティブ・ライツ/ジャスティス運動、移住女性に対する滞在管理とリプロダクティブ・ジャスティス、そして歴史的に見た「産む主体」への権力介入について、コメントを合わせて掲載している。投稿論文については厳正な審査を通過した4本を掲載した。また書評セクションでは、近年に刊行されたジェンダー・フェミニズム関連書籍の中から17 冊を取り上げた。



また『ジェンダー研究』第 26 号特集論文の日本語翻訳「ロー判決以後のアメリカ合衆国におけるリプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)」を、IGS 報告書シリーズ(IGS Project Series)No.27 としてウェブ公開した。[参照:本報告書59頁「学術成果の発信」]

6. 文献収集・史料電子化、ウェブ発信、社会貢献

ジェンダー研究所では、寄贈図書・資料の受け入れ、所属研究者らの著書や研究関連図書、主催シンポジウム・セミナーおよび『ジェンダー研究』関連の書籍の購入を進めている。2023年度も、例年と同様に文献・資料の収集を進め、研究環境の構築に取り組んだ。

またウェブサイトによる情報発信も、ジェンダー研究所が力を入れている分野である。各イベントの 事前案内だけでなく、イベント開催後は開催報告の日本語および英語による発信にも取り組んでいる。 また 2023 年度は、前年度に引き続き、ウェブサイト掲載情報の精査を行った。ジェンダー研究に関わる 最先端の情報を、より分かりやすく、国際的に発信するための検討と整理を進めている。

社会貢献の面では、上記のウェブサイトによる発信のほか、国際シンポジウム・セミナーを一般公開し、同時通訳をつけるなどして成果の還元に努めた。また各所属研究者は、報道機関による取材に応じることなどを通して、広く世間にジェンダーに関わる知見を広めた。[参照:本報告書 65 頁「文献収集公開・史料電子化・web 発信」、71 頁「社会貢献」]

7. 構成メンバー

教員を含め研究所の中核となるメンバーは前年度から変化なく、引き続き研究所の事業に取り組んだ。スタッフにおいてはアカデミック・アシスタントとして花岡奈央氏が新たに着任し、ウェブ関係の業務を担ったほか、研究協力員として、4月からは佐々木真理(実践女子大学)教授、フランス・ローズ・ハートライン氏(日本学術振興会外国人特別研究員)、8月からはペトリス・フラワーズ(ハワイ大学マノア校)教授が加わり、セミナー・報告会等で研究所に貢献した。[参照:本報告書103頁資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」、76頁資料①「構成メンバー」]

2.

研究プロジェクト

2023 年度研究プロジェクト成果報告

- (I) IGS 研究プロジェクト
- (II) 外部資金研究プロジェクト
- (III) 海外の助成金による研究プロジェクト

▶ 2023 年度研究プロジェクト成果報告

学際的、先駆的ジェンダー研究を目指して

ジェンダー研究所は 2015 年以来、グローバル女性リーダー育成研究機構の中核的な研究機関として 先端的ジェンダー研究に取り組んできた。その前身であるジェンダー研究センターは、国際的なジェン ダー研究のネットワークにおける東アジアにおける重要なハブとして活動し、21 世紀 COE プログラム 『ジェンダー研究のフロンティア』(2003~2007 年度)をはじめとした研究プロジェクトを通じて広く 注目を集めてきた。ジェンダー研究所はこの研究成果を引き継ぎつつ、伝統的な学問分野に縛られない 学際的で先駆的なジェンダー研究を志している。ジェンダー研究所は、アジアにおけるジェンダー研究 の拠点を目指し、国際的な共同研究と、その成果発信を積極的に進めており、蓄積された研究成果を広 く社会へ還元していく。

先端的な研究を推進し、広い学術ネットワークを構築

ジェンダー研究所は、(I) IGS 研究プロジェクト、(II) 外部資金研究プロジェクト、(III) 海外の助成金によるプロジェクトにおいて、先端的な研究を推進している。とりわけ IGS 研究プロジェクトでは学内研究員、客員研究員、研究協力員の協力を得ながら広い学術ネットワークを構築し、その成果を意欲的に発信している。2023 年度もそれぞれの研究分野において研究会や公開セミナー、国際シンポジウムを実施したほか、成果出版物の刊行、国際共同研究や国際ネットワークの構築に取り組んだ。

アジア工科大学院大学(AIT)における院生交流(本報告書 54~55 頁参照)は、派遣 11 名・受け入れ 2 名というこれまでを大きく上回る規模での実施を実現させることができた。また研究所メンバーも国内外での学術ネットワークを拡大させ、学会発表や講演などを活発に行った。個々のプロジェクトの研究概要については、本報告書 16~21 頁を参照していただきたい。

国際シンポジウム、IGS セミナー、研究会の開催と学術雑誌『ジェンダー研究』の刊行

各研究分野におけるシンポジウムやセミナーの開催と、『ジェンダー研究』の刊行により、成果発信に力を入れた。

2020年度以来、ジェンダー研究所主催の企画の大半は Zoom を利用し、オンライン配信ないしオンラインと対面のハイブリッドにおいて実施されている。Zoom の導入は、当初は新型コロナウイルス感染症対策において進められたが、オンライン配信には、これまで地理的距離や生活パターン、健康上の理由などさまざまな事情のためにお茶の水女子大学に直接足を運ぶことが難しい方々も参加ができるという大きな利点があることがわかった。ジェンダー研究所ではより多くの視聴者の参加を実現するため、企画によっては Zoom ウェビナーを使用することで質の高いオンライン配信を心がけてきた。一方で、学術ディスカッションはイベントの実施時間中に完結するわけではなく、対面での交流を積み重ねていくことが重要な意味をもつため、会場に集まってのイベントも可能な限りで実施している。

ジェンダー研究所は、年に1度、学術誌『ジェンダー研究』の刊行を続けている。最新刊である第 26 号は、2022 年度に実施された IGS 国際シンポジウムにおけるディスカッションを受け、論文 1 本とコメント 3 本から成る特集「リプロダクティブ・ジャスティス:妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」が巻頭を飾っている。第 26 号は、この特集に加えて投稿論文 4 本、書評 17 本を収録し、2023 年 7 月に刊行された(本報告書 $60\sim62$ 頁参照)。

2023 年度研究プロジェクト 分野別一覧

(I) IGS 研究プロジェクト

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

東アジアの越境的女性運動

資本と身体のジェンダー分析

性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析

反公害/環境運動史におけるジェンダー分析

グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー

文学・芸術文化表象とジェンダー

(II) 外部資金研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 B (課題番号:23H03654)

フェミニズム理論による新たな国家論の構築:ケア概念と安全保障概念の再構想から

科学研究費基盤研究 B (課題番号:23H00888)

日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究

科学研究費基盤研究 B (課題番号:20H01468)

新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー

科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化 B)(課題番号:21KK0033)

人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー

科学研究費基盤研究 C (課題番号:19K12603)

香港における移住女性の再生産労働力配置:「グローバル・シティ」のジェンダー分析

科学研究費基盤研究 C (課題番号:23K11676)

「からゆきさん」にみる性・移動・再生産領域

科学研究費若手研究(課題番号:23K17134)

日本による親ジェンダー外交の展開:安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析

(Ⅲ) 海外の助成金による研究プロジェクト

ノルウェーリサーチカウンシル (287699)

INTPART 「ジェンダー平等/ダイバーシティ:ノルウェー・日本共同研究」

ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku(UTF-2020/10135)

UTFORSK「ノルウェーと日本におけるジェンダー平等およびダイバーシティ教育 |

(I) IGS 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究者】三浦まり(上智大学教授)、スティール若希(元名古屋大学特任准教授)、 濵田真理(Stand by Women 代表)、Soo-hyun Kwon(Sogang University)ほか

【概要】

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本と韓国、台湾の議員を対象としたアンケート調査による国際比較分析を行ない、東アジア地域において、女性の政治代表性を向上または妨げる要素は何か、政治制度におけるジェンダー多様性を実現させるにはどのようにしたらよいかを検討する。

IGS 研究プロジェクト

東アジアの越境的女性運動

【研究担当】大橋史恵(IGS 准教授)

【概要】

今日の女性運動は、路上や広場、公共交通機関、大学キャンパス、議場、ジャーナリズム、サイバー空間など、さまざまな場で実践され、課題解決に向けた国際的連帯とアクションを生み出している。本研究は東アジアにおけるそのような越境的女性運動の展開について考察するものである。具体的には(1) ILO「家事労働者のためのディーセント・ワークに関する条約」(第 189 号条約)に関連する労働運動、(2) 反軍事化をめぐる女性たちの運動、(3) 中国の女権主義者たちのトランスローカル/トランスナショナルな運動に目を向ける。

IGS 研究プロジェクト

資本と身体のジェンダー分析

【研究担当】大橋史恵(IGS 准教授)

【共同研究者】足立真理子(IGS 客員研究員)、板井広明(専修大学准教授/IGS 研究協力員)

【概要`

本プロジェクト「資本と身体のジェンダー分析:資本機能の変化と『放逐』される人々」は、グローバル金融危機以降の資本の中枢機能の変化を分析する。サスキア・サッセンの「放逐 expulsions」概念に着目して、従来の身体の断片化や排除/包摂の概念では把握不能な「放逐」の「常態化」をジェンダーの視点から分析する。

(I) IGS 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析

【研究担当】嶽本新奈 (IGS 特任講師)

【概要】

本研究プロジェクトは、開国以降に海外へ渡航し、渡航先で性売買をしていた女性たち(「からゆきさん」)の状況を再生産領域の観点から考察することを目的としている。「からゆきさん」については性売買の問題のみに注目されがちだが、女性たちの再生産領域の問題と連関する「経験」として捉える必要があり、女性たちの生涯を視野に入れて考察する。

IGS 研究プロジェクト

反公害/環境運動史におけるジェンダー分析

【研究担当】嶽本新奈(IGS 特任講師)

【共同研究者】西亮太(中央大学准教授)、番園寛也(熊本学園大学水俣学研究センター客員研究員) 【概要】

天草に建設される石炭火力発電所への反対運動として始まった天草環境会議は 2023 年で 40 回目を迎えた。この環境会議は、反公害運動が下火になった 1984 年の段階で石炭火力発電建設を公害と環境の複合的な問題としてとらえており、国内外の運動ネットワークと知的影響関係を持っていた。この運動の歴史的な歩みと運動内外におけるジェンダー的差異の機能や役割を資料と聞き取りをとおして検討する。

IGS 研究プロジェクト

グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー

【研究担当】本山央子(IGS 特任 RF)

【概要】

本研究プロジェクトは、グローバル政治経済構造が変容する中で、日本がいかに国際ジェンダー平等 規範と交渉しつつ、内的ジェンダー秩序との矛盾を統制しながら「先進国」としての特権的地位や国内 における権力の正統性を主張しようとしているかを、主に安全保障や外交政策へのジェンダー/フェミ ニズムの導入について検討しようとするものである。

IGS 研究プロジェクト

文学・芸術文化表象とジェンダー

【研究担当】戸谷陽子(IGS 所長/お茶の水女子大学教授)

【概要】

文学や芸術文化表象 (ポップカルチャーおよびやサブカルチャーを含む)、広告を対象にそのジェンダー表象を分析し、日常にみられるジェンダー意識の変遷を跡づける。

(II) 外部資金研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 B (課題番号:23H03654)

フェミニズム理論による新たな国家論の構築:ケア概念と安全保障概念の再構想から

【研究担当】申琪榮(IGS 教授)[研究分担者]、本山央子(IGS 特任 RF)[研究分担者] 【研究代表者】岡野八代(同志社大学教授)

【期間】2023~2026年度

【概要】

現在、政治学の主要な研究対象であった国家は、市民社会との関連だけでなく、より広くより複雑な形で、国際社会、環境、経済、そしてジェンダーといった視点から、その歴史を踏まえて問い直される時がきている。そこで、本研究では、第二波フェミニズム運動を受けて深化した 90 年代以降のフェミニズム理論を批判理論として捉え、男性中心主義を克服するための鍵をケア労働の配置とその権力的分配の在り方の刷新のなかに見出すことによって、武力を背景とした安全保障概念を見直し、環境や国際社会にまで射程を拡げたフェミニズム理論に依拠した国家論を構想する。

科学研究費基盤研究 B (課題番号:23H00888)

日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究

【研究担当】大橋史恵(IGS 准教授)[研究分担者]、平野恵子(横浜国立大学准教授/IGS 研究協力員) [研究分担者]

【研究代表者】定松文(恵泉女学園大学教授)

【期間】2023~2025年度

【概要】

本研究は以下二つの課題から構成される。課題Iでは現在の家事・ケア労働市場・準市場・非市場における需要と労働者および経験者の労働実践と就業選択の理由に関する定性的調査として、現在の移住家事・介護労働者および日本での介護・ケア労働の経験者への聞き取り調査を計画している。課題IIは移住家事・ケア労働者の連帯と社会変革の主体性の研究である。調査からキーパーソンを選び、複数回の聞き取り調査により地域社会の再生産を行う主体性を析出する。アジア諸国と国際労働組合総連合(ITUC)等における家事・ケア労働者の運動と連帯の動向を調査し、グローバルな潮流の中での日本の移住労働者との連携や運動の展開について考察する。

科学研究費基盤研究 B (課題番号:20H01468)

新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー

【研究担当】大橋史恵(IGS 准教授)[研究分担者]、足立眞理子(お茶の水女子大学名誉教授/IGS 客 員研究員)「研究分担者]

【研究代表者】堀芳枝(早稲田大学教授)

【期間】2020~2023年度

【概要】

本共同研究は、IT-BPO の実証研究と国際比較によって、アジアについての新しい国際政治経済学を構築するものである。具体的には IT-BPO 産業の新国際分業の成立にともなう女性の労働力の再配置と、成長の果実としての中間層の成長と消費、都市化の進展、さらにはこうした経済社会の変容が、各国の民主主義に与える影響を国際比較から検討する。

(II) 外部資金研究プロジェクト

科研費国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 B) (課題番号:21KK0033)

人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー

【研究担当】大橋史恵(IGS 准教授)[研究分担者]

【研究代表者】堀口正(大阪公立大学教授)

【期間】2021~2024年度

【概要】

本研究は科研費・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))を受け、2021年12月から2025年3月にかけて実施される国際共同研究のプロジェクトである。人民公社期(1950年代~70年代)の中国農村における生活秩序の変化とジェンダーについて、資源配分のあり方に着目して、実証的に検討することを目的とする。

中国農村では、1949年の「暫定憲法」や50年の「婚姻法」「土地改革法」の公布、また人民公社制度の展開により、封建的な慣習の廃絶が進められるとともに男女平等の制度的基盤が構築されていった。ところが、生産労働への参加の程度の男女差(労働点数に対する女性差別の存在も)、耕地や水利施設などの共有資源へのアクセスに女性と男性とでどの程度違いがあったのかなど、不明な点は多い。さらに公共食堂や託児所の現実的な利用状況、家事やケアなど再生産労働の性別分業についても、研究の空白部分になっている。

以上のことから、①各地農村における人民公社期の資源配分のあり方を解明すること、②世帯内外における生産・再生産労働の労働力配置の実態を考察し、「村」や「家」の権力関係や規範にどのような揺らぎがあったのかを解明すること、③さらに①②と関係する問題として、国家レベルの指針や計画生育が基層社会における生活秩序に与えた影響を解明する。

科学研究費基盤研究 C (課題番号:19K12603)

香港における移住女性の再生産労働力配置:「グローバル・シティ」のジェンダー分析

【研究代表者】大橋史恵(IGS 准教授)

【期間】2019~2023年度

【概要】

本研究は、香港社会において異なる移住女性による再生産労働力がどのように配置されてきたかを、中国人家事労働者と外国籍家事労働者およびその雇用主を対象としたオーラル・ヒストリーの聞き取りから明らかにするものである。香港が輸出志向工業化路線から東アジアの金融・貿易サービスの中枢を成す「グローバル・シティ」へと転換した時期は、外国籍の家事労働者の受け入れが拡大していくとともに、主に広東省に出自をもつ中国人女性の労働力配置に変化が生じた時期と重なる。1980年代末から今日までの香港の社会経済構造の変動において、トランスナショナルにあるいはトランスローカルに移動して家事労働者になった女性たちはどのように受け入れられたのか。異なるケアの担い手たち(移住女性)と受け手たち(雇用主)の「ケアの記憶」を通じて香港の再生産領域の変化をとらえたい。

(II) 外部資金研究プロジェクト

科学研究費基盤研究(C)(課題番号:23K11676)

「からゆきさん」にみる性・移動・再生産領域

【研究代表者】嶽本新奈(IGS 特任講師)

【期間】2023~2025年度

【概要】

「からゆきさん」の移動を現地における再生産労働の需要と供給の観点から把握することで、その移動 現象を構造的に解釈することが可能になると考える。この視点は、娼館を出て以降の女性の選択と経験 を「経済的営為」の選択肢として解釈することを可能にし、より包括的に考察することができる。こう した「からゆきさん」の「経済的営為」の諸相を考察すべく、再生産労働概念を用いて彼女たちのミク ロな経験と、国家・植民地・コミュニティというマクロな動きを接合し、その構造を明らかにする。

科学研究費若手研究 (課題番号:23K17134)

日本による親ジェンダー外交の展開:安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析

【研究代表者】本山央子(IGS 特任 RF)

【期間】2023~2027年度

【概要】

本研究は、日本が国内ジェンダー秩序との矛盾をいかに統制しながら、国際ジェンダー規範との交渉を通して「先進国」としてのアイデンティティを構築し特権的地位を主張してきたのか明らかにすることを目的としている。明治期以降の外交を通じた国際ジェンダー規範との交渉を包括的に把握し、特に2010年代以降の外交におけるジェンダーの位置づけの変化について、歴史的植民地主義、安全保障の再定義、新自由主義的ガバナンスの台頭という3つの要因に注目して分析を行う。

(Ⅲ) 海外の助成金による研究プロジェクト

ノルウェーリサーチカウンシル (287699)

INTPART 「ジェンダー平等/ダイバーシティ:ノルウェー・日本共同研究」

【研究担当】

石井クンツ昌子(お茶の水女子大学理事・副学長:本学側代表)

戸谷陽子(IGS 所長/基幹研究院人文科学系教授)

小玉亮子(IGS 研究員/基幹研究院人間科学系教授)

吉原公美(リサーチ・アドミニストレーター:事務局)

仙波由加里(IGS 研究協力員)

佐野潤子(IGS 研究協力員/東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科教授)

【期間】2019~2023年度

【概要】

ジェンダー平等とダイバーシティに関する、NTNU ジェンダー研究センターとの共同プロジェクト。 ノルウェーと日本のジェンダー平等およびダイバーシティの現状状況について理解を深め、社会・文化・ 歴史・政治的背景を含めて分析・考察する国際比較研究し、類似と相違についての理解を深めることを 通じて、新たな知見を得ることを目指す。担当研究者が、それぞれの専門領域に沿ってノルウェーの研 究者と組んで研究を進める(本報告書 51 頁参照)。

ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku(UTF-2020/10135)

UTFORSK 「ノルウェーと日本におけるジェンダー平等およびダイバーシティ教育」

【研究担当】

小林誠(基幹研究院人間科学系教授)[本学側代表]

戸谷陽子(IGS 所長)[本学側プロジェクト・コーディネーター]

石井クンツ昌子 (理事・副学長)

岡村利恵 (グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

吉原公美 (リサーチ・アドミニストレーター)

ノルウェー科学技術大学(NTNU)ジェンダー研究センター研究者

【期間】2021~2025年度

【概要】

ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築するプロジェクト。学生、若手研究者、教員が、パートナー大学での共同セミナーや共同指導を経験するなど、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。研究発表や産学連携への参与など若手研究者への機会提供や、論文の共同執筆など研究者同士の将来的なパートナーシップ発展につながる活動も行う。また、SDGs のジェンダー・ダイバーシティ関連の目標達成に資する成果を目指す(本報告書 51 頁参照)。

3.

国際シンポジウム・セミナー

2023 年度 国際シンポジウム・IGSセミナー・研究会詳細

▶ 2023 年度 国際シンポジウム・セミナー概要

2023 年度は IGS 国際シンポジウム 1 件、IGS セミナー6 件、研究会 1 件を主催したほか、共催シンポジウム 2 件、共催研究会 1 件、後援イベント 1 件を開催した。詳細は次頁以降を参照いただきたい。

IGS 主催国際シンポジウム	
グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力	25 頁
IGS 主催セミナー	
トランス排除を乗りこえるみんなのフェミニズム:連帯という実践へ	28 頁
「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題: Lennon & Alsop "Gender Theory in Troubled Times"を読む	31 頁
「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とその可能性	32 頁
「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育:本質主義の克服に向けて	34 頁
リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)の日本における政策課題と女性運動:堕胎罪・優生保護法を中心に	36 頁
今日の日本におけるトランスジェンダー研究	38 頁
IGS 主催研究会	
IGS 研究協力員研究報告会	40 頁
IGS 共催イベント	
出版記念シンポジウム 『キャリアに活かす雇用関係論』を読んで・使う:ジェンダー視点を貫く授業	42 頁
国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー (IMAGE) 分科会	
仏・旧植民地出身移民女性を中心化する予示的政治の空間:政治的連帯の隠された戦術	43 頁
グローバル女性リーダー育成研究機構主催国際シンポジウム 女性学長国際シンポジウム アカデミアにおける女性のリーダーシップと DEI:女性学長が目指す 21 世紀に輝く大学教育	44 頁
IGS 後援イベント	
日本フェミニスト経済学会 2023 年度大会 フェミニスト経済学とローカリティ――移動の自由と生き方の幅	45 頁

IGS セミナー「リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会 正義)の日本における政策課題と女性運動: 堕胎罪・優生保護法を中心に」



IGS セミナー「今日の日本におけるトランスジェンダー研究」



▶ 2023 年度 主催国際シンポジウム詳細

IGS 国際シンポジウム

グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力

【日時】2023年12月8日(金)14:00~16:45

【会場】

オンライン開催 (Zoom ウェビナー)

【パネリスト】

キャロル・ハリントン (ヴィクトリア大学上級講師)

「『有害な男性』と『性的危険にさらされる女性・少女』の統治 ——反性暴力政策による異性愛規範家族と家父長制の安定化」

工藤晴子(神戸大学准教授)

「難民とセクシュアリティ:脅威から保護の対象へ」

嶺崎寛子 (成蹊大学准教授)

「ジェンダー・オリエンタリズムと定義する権力」

【コメンテーター】青山薫 (神戸大学教授)

【モデレーター】本山央子(IGS 特任リサーチフェロー)

【総合司会】嶽本新奈(IGS 特任講師)

【開会挨拶・趣旨説明】申琪榮(IGS 教授)

【閉会挨拶】戸谷陽子(IGS 所長/お茶の水女子大学教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(同時通訳有)

【参加者数】144名

【趣旨】

長らく恥と沈黙に支配されてきた性暴力を可視化し、被害者が自らの言葉で語ることのできる空間を切り開くことは、フェミニズム運動が追求する重要な目標の一つであり続けてきた。しかし複数の権力関係が交差する階層的なグローバル政治の中で、セクシュアリティと暴力をめぐる言説は、被害者をエンパワーする側面だけでなく、ネイションや人種の境界を管理し、家父長制や異性愛主義を強化するような側面ももっている。

このシンポジウムでは、国際関係論、文化人類学、難民研究という異なる領域の研究者を招き、グローバル政治におけるセクシュアリティと暴力をめぐる言説がつくりだす権力関係を検討する。そして、何が暴力であり誰が保護/排除の対象であるかを定義し統制するような権力を強化するのではなく、解体し挑戦するフェミニスト政治の可能性を探る。

【開催報告】

2023年12月8日、国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」が開催された。第一部では3名のパネリストからの報告が行われた。第二部ではコメンテーターが論点を提示し、



それらについてパネリストたちが議論を行った。

はじめに申琪榮氏が本シンポジウムの趣旨を次のように述べた。本シンポジウムのねらいは、暴力と セクシュアリティの関係をグローバル政治のアリーナにおいて問うことにある。権力とセクシュアリテ ィとは密接な関係にあり、セクシュアリティは排除と暴力の根拠として動員され続けている。今日の戦 争や武力行使も、こうしたセクシュアリティの権力作用への着目なしに理解することはできないだろう。 シンポジウム第一部では、異なる専門領域の3名による報告が行われた。最初の報告者キャロル・ハ リントン氏からは、有害な男性性(toxic masculinity)をめぐる問題提起がなされた。ハリントン氏によ れば、有害な男性性という言葉はフェミニズムに起源があるのではなく、ミソポエティックな男性運動 のなかで生まれたという。男性たちの有害な暴力行為は、彼らが父親の不在によって傷ついたためだと 説明される。ミソポエティックな男性運動においては、失われた真の男性性、そして家父長制を取り戻 すことが正当化される。本報告では、国際機関による途上国の男性支援プログラムや職場でのセクシュ アル・ハラスメントをめぐる言説など、豊富な事例が提示された。事例からは、ジェンダーの暴力や不 平等が、経済的な構造ではなく男性のパーソナリティに還元されることが示された。男性たちに家庭や 職場で女性をサポートするよう行動変革を促すことは、女性たちの有報酬労働への参加を促進するとい うウィメノミクス (womenomics) の観点から正当化される。 さらに有害な男性性は望ましい男性像/望 ましくない男性像を作り出し、女性に協力的で「ヘルシーな」男性の新たなリーダーシップを許容する。 これは異性愛規範と家父長制を助長し、女性がひとりで生きられることには繋がらないと、ハリントン 氏は主張する。有害な男性性の言説が持つこのような作用に注意する必要があるとして、報告は締めく くられた。

次の報告者の嶺崎寛子氏は、ジェンダー・オリエンタリズムがもたらす言説と現実の落差について論じた。暴力はつねにマジョリティによって定義づけられ、さらにそこにはジェンダー・オリエンタリズムが作用する。ジェンダー・オリエンタリズムとは西洋と東洋を二項対立的に捉え、東洋に特有とされる性差別を東洋の「遅れ」とみなすまなざしである。そこではグローバルな経済的・政治的問題は不問にされてしまう。ゆえに「暴力」が誰によって、どこから、誰に向けて、どのような意図で定義されているかを知ることが必要である。報告の後半では上記の点を検討するために、父親が娘の婚前妊娠をめぐっていかに名誉に基づく暴力を回避したかというエジプトの事例が紹介された。事例からは、婚前妊娠が名誉に基づく暴力に必ずしも直結するわけではないこと、名誉に基づく暴力はそれを回避するための社会関係資本がない人たちの「最後の手段」である可能性が高いことが明らかになった。ここから嶺崎氏は、名誉にもとづく暴力をめぐる言説と現実には甚大な落差があることを指摘する。ジェンダー・オリエンタリズムを脱構築するには、文脈やディティールを知る必要性がある。報告ではジェンダー・オリエンタリズムの視座から言説の意図を考えることの重要性が強調された。



最後の報告者工藤晴子氏は、合衆国の政策において、クィアな難民たちがいかに保護の対象/国家安全保障の脅威とされてきたかを論じた。2010年前後から国際機関がLGBTIQ+難民や亡命希望者の問題に焦点を当てるようになった。こうした包摂の流れはある程度歓迎すべきだが、注意もしなければならない。合衆国の歴史を遡れば、クィアな移民は保護の対象というより国家安全保障上の脅威とされてきた。ホモセクシュアルな移民は長らく「精神障害」や「性的逸脱」等とされ排除されてきた。さらに1980年代にはエイズ陽性者が難民受け入れを拒否されたという。他方で、近年合衆国はLGBTIQ+難民と亡命希望者の保護を提唱するようになるが、これはグローバルなヒエラルキーを形成する。それはクィアな人々への暴力と人権侵害が蔓延する「野蛮な」グローバルサウスと、クィア難民を受け入れる「進歩的な」グローバルノースという対立構造である。さらに、このようなグローバルな性のポリティクスは決して単線的ではない。トランプ政権やCovid-19の影響下では、クィアな移民の除外を再び強化する政策が取られた。クィアな個人の保護に加え、LGBTIQ+難民と亡命希望者の保護をめぐる言説がもたらす影響を問題視することも重要であるとして、工藤氏は報告を締めくくった。

第二部の冒頭では、青山薫氏が3名の報告にコメントを行った。青山氏は、3名の報告には次のような共通点があったとする。はじめにセクシュアリティの政治/ジェンダーの政治においてはネオリベラルな国家によって問題が個人化され、構造的な問題への言及が回避されることである。構造的な問題には二項対立的なジェンダーだけではなく、人種や経済が必ず深く絡んでいることを忘れてはならない。次に、名づけることの権力である。特に嶺崎氏の報告で強調されたように、名づけることにはオリエンタリズムやナショナリズムがはたらく。そしてナショナリズムの言説も問題を個人化し、グローバルな搾取の構造を不問に帰す作用を持つ。誰が、誰をどのように名づけるか、注意を払う必要がある。さらに、上記の点と国家体制の維持を物理的に表象する必要との関係である。セクシュアリティの政治では、政治を個人化する力がはたらき続けている。国家によって、異性愛規範が維持され利用されることを批判的に考えることが必要である。これを踏まえ青山氏は、下記3つの論点を提示した。①なぜ今、とくに、ジェンダー/セクシュアリティの政治なのか。②名づけの権力を取り戻すときのジレンマ。③構造的な権力関係を揺るがす戦略として、私たちは何をすべきか。

パネリストは、上記3つの論点および視聴者からの質問に答えた。「①なぜ今、とくに、ジェンダー/セクシュアリティの政治なのか」については、ジェンダー/セクシュアリティの問題の根底には経済の問題があること、ジェンダー/セクシュアリティは個人の身体や感情に強くはたらきかける作用を持つために構造的な議論が捨象されてしまうことが議論された。「②名づけの権力を取り戻すときのジレンマ」では、名づけることは周縁化されてきた経験を可視化する一方で、名づけることでさらに周縁化・不可視化されるものがあることを自覚することの重要性も共有された。「③構造的な権力関係を揺るがす戦略」に対しては、現実と言説の落差を捉えること、女性の経済的自立を可能にする政策にフォーカスすることの必要性が提起された。さらに視聴者から寄せられた質問「ポスト冷戦時代の国家イメージ戦略にクィアな難民が利用される理由」、「有害な男性性に陥らないための方法」への応答もなされた。このように本シンポジウムでは、多くの問いが共有された。これらの問いはこれからも引き続き考えられるべきものであるとして、シンポジウムは幕を閉じた。

記録担当:小口藍子(お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻)

▶ 2023 年度 主催 IGS セミナー詳細

IGS セミナー(学内限定)

トランス排除を乗りこえるみんなのフェミニズム 連帯という実践へ

【日時】2023年7月21日(金)13:00~14:30

【会場】共通講義棟2号館101室(対面)

【スピーカー】

影本剛(『被害と加害のフェミニズム #MeToo 以降を展望する』 監訳者/立命館大学授業担当講師ほか)

【パネリスト】

花岡奈央(ジェンダー研究所アカデミック・アシスタント) 森田真梨子(お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間発達科学 専攻)

【司会】

髙橋奏音(お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会 科学専攻)



鈴庄美苗(お茶の水女子大学科目等履修生/三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 公共経営・ 地域政策部主任研究員)

【企画説明】申琪榮(IGS 教授)

【主催】ジェンダー研究所、「フェミニズム理論の争点」ゼミ

【後援】解放出版社

【言語】日本語

【参加者数】57名

【趣旨】

本セミナーは、クォンキム・ヒョンヨン編著『被害と加害のフェミニズム――#MeToo 以降を展望する』(解放出版社)を題材としたもので、本著の監訳者である影本剛氏をゲストスピーカーにお招きし、開催した。最初に、影本氏より韓国社会における本著の位置づけや主題についてのご報告をいただき、その後は現代日韓社会で「被害者中心主義」がトランスジェンダーの排除をもたらしうることについて、パネリストを迎えての議論を行った。トランスジェンダーの排除をめぐってフェミニストの中で起きている「分断」を乗りこえるために、フェミニズムをまなざす我々に今何が出来るのか、共に考えを深める場となった。

【開催報告】

2023 年 7 月 21 日 (金)、IGS セミナー「トランス排除を乗りこえるみんなのフェミニズム――連帯という実践へ」が、研究所所属教授・申琪榮氏の担当する博士課程前期ゼミ「フェミニズム理論の争点ゼ

ミ」との共同で開催され、ゼミ受講者の髙橋奏音氏、鈴庄美苗氏により司 会進行が行われた。

まず申氏から、本著出版元である解放出版社から本セミナーをご後援いただいた旨と、ゼミ生主導による本セミナーの企画・運営についての経緯が説明された。そして、『被害と加害のフェミニズム――#MeToo 以降を展望する』監訳者である影本剛氏より、韓国社会におけるフェミニズム運動・理論の受容やその過程の説明が行われた。

本著が刊行された背景として、影本氏は、2020 年に立命館大学での教 養科目の内容を構成するために関連書籍を通読した際に、最も感銘を受け



たものとして本著に出会ったと語った。翻訳については、2021年の11月から共訳者のディディ氏とともに編集を始めたと述べる。影本氏は、本著の特筆すべき点として次の2点を強調する。第一に、本著を含めた「トランス叢書」シリーズ(既刊4冊)を通して、本著の制作グループである「トランス研究会」(日本語発音の「trans」をハングルで表記した名称を持つ韓国の性文化研究会)が長年にわたって自分たちの言語を作り上げてきたという点である。本書の筆者たちは1990年代からそれぞれの現場で活動し、「フェミニズム冬の時代」と言われる2010年代前後の時期においても、フェミニズムの手法を手放さずに培ってきた歴史的な蓄積、そのような韓国におけるフェミニズムの困難で複雑な文脈を確りと踏まえた上で2015年以降の「フェミニズム・リブート」の諸現象を捉えた点に本著の魅力があると説明する。第二に、本書が二次加害と被害者中心主義という言説批判を通して鋭く切り込んでいるのは、韓国社会の文化という側面だということだ。つまり司法的な規範において裁くことができず「合法」とされてしまう現象、そこに見出すことができる社会の歪みについて、的確に問題提起を行なっていると、本著の魅力を伝えた。

次に、パネリストとして花岡氏と森田氏が、影本氏の報告と本著への応答を行なった。

花岡氏は、自身の修士論文である SNS におけるトランス排除言説の分析について簡潔に説明を行い、日本社会での文脈に基づき応答した。花岡氏は、Twitter におけるハッシュタグ「#ファイヤーデモ」を分析対象とし、"生物学的な女性の安全を守るための社会運動"としてのオンライン・フェミニズムの動向を研究した。自身の研究結果と影本氏の報告を踏まえて、花岡氏は、日本におけるファイヤーデモが、韓国におけるトランス排除的なフェミニズムの流れとの連帯から始まった運動であると指摘する。そしてまた、本著で問題視されている「被害者中心主義(『被害』による連帯)」が、日本におけるファイヤーデモにも顕著に現れているのではないか、と自身の見解を示した。最後に花岡氏は、影本氏の「韓国においては、国家が兵役の対象となる男性を規定すると同時にトランスジェンダーも規定している側面がある」という発言に触れ、日本における排除をめぐる現状を指摘した。2023 年 6 月に成立・施行された LGBT 理解増進法の議論において、SNS など各所でトランス排除言説を主張してきた人々が衆議院内閣委員会で参考人として発言したことは、排除言説を行う勢力が着々と力を伸ばしているといった現実を反映しているという。

森田氏は、我々が「不平等が自然化されているシステム」の中で生きていることを、我々自身が自覚できない構造があることに問題意識を持っていると述べ、心理学領域における修士論文の経過報告を用いて影本氏に応答した。

森田氏は、トランス排除についての「気づき」に関する調査で明らかとなった、ミサンドリー(男性嫌悪)的な語りに対して共感を覚え、トランス排除言説に同調した人々の語りについて説明する。その



ような人々は、トランス排除言説を支持しながらフェミニズムをまなざすことへの自己矛盾の感覚と違和感を積み重ねた結果、自身の思考が「差別的」であると認識するに至ったという。自己矛盾の感覚と違和感とは、具体的には、男性からの「過激で差別的な女性への発言」をミラーリングして「過激で差別的な男性への発言」をしている、という自身の行為への「気づき」がその一例である。またここには、これまでフェミニストが抵抗してきたルッキズム(外見中心主義)とみなされるような「基準」を、トランス女性には適用するといった言説の矛盾に触れることによる「気づき」も含まれる。調査対象者は、これらの「気づき」によって、自身のトランス排除言説に対する同調にブレーキがかかったという。森田氏はこれらの結果を踏まえて、個人によって「何が差別として認識されているか」と同時に、「何が差別として認識されているか」と同時に、「何が差別として認識されているか」と同時に、「何が差別として認識されているか」と同時に、「何が差別として認識されているか」と同時に、「何が差別として認識されているか」の両者をこれからの分析の方針としていきたいと結んだ。

最後に、ゲストスピーカーとパネリストとのトークセッションが行われた。「連帯のためにどのように我々はアプローチをし、行動していくべきなのか」という質問について、影本氏は、"運動の主体でないとしても、連帯とは違う存在だからこそするものであり、連帯をしようとし続けることで自らを主体化させていく"という「連帯」を続けていくことが大切だと強調した。また、花岡氏は、"自身の特権性を自覚しつつ、フェミニズムやクィアをめぐる事象に興味がある人々を巻き込んでいく"「連帯」のあり方をあげ、SNS が差別と排除の蔓延する言説空間であることは事実だとしながらも、他方で、SNS によりセーファーなコミュニティへのアクセスが可能となっている人がいることに触れ、あらゆる「連帯」のあり方を模索し続けたいと述べた。

森田氏は、議論の相手が生身の人間であることを実感できるようなコミュニケーションの重要性を強調し、"お互いがお互いに侵襲されたことを伝え合えるような空間を作っていく"という「小さな実践」を提示した。

最後に影本氏は、日本におけるこれからのフェミニズムのあり方を議論するなかで、日本で「慰安婦」 問題についての研究が熱を持って行われてきたことに敬意を表しつつも、日本の植民地支配に対する批 判と反省を遠ざけずに、ここからさらなる議論を積み重ねていくことの重要性を述べた。そして、韓国 社会において、「慰安婦」問題こそが 1990 年代の社会の雰囲気を変化させてきたということを背景に、 女性たちの声が記録されてきたことを評価し続けなければならないと結んだ。活発な議論と多様な応答 が行われ、セミナーは終了した。

記録担当:唐井梓(お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻)

IGS ワークショップ(学内限定)

「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題

~Lennon & Alsop "Gender Theory in Troubled Times"を読む~

【日時】2023年10月20日(金)15:00~18:00

【会場】人間文化創成科学研究科棟 408 室

【報告】

本山央子(IGS 特任リサーチフェロー)

【コメント】

井谷聡子(関西学院大学准教授) 平山亮(大阪公立大学准教授) 松永典子(早稲田大学准教授)

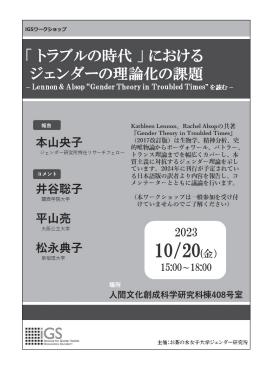
【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】7名

【開催概要】

Kathleen Lennon、Rachel Alsop の共著『Gender Theory in Troubled Times』(2017 改訂版、Polity)は、生物学、精神分析、史的唯物論からボーヴォワール、バトラー、トランス理論までを幅広くカバーし、本質主義に対抗するジェンダー理論を示している。2024年に刊行が予定されている日本語版の訳者より内容を報告し、コメンテーターとともに議論を行った。



IGS セミナー

「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とそ の可能性

【日時】2023年11月21日(火)16:00~17:30

【会場】ハイブリッド開催(人間文化創成科学研究科棟 408 室、

Zoom)

【報告】

佐喜真彩(立教大学ほか非常勤講師)

【ディスカッサント】

土井智義 (明治学院大学国際平和研究所助手)

【司会】嶽本新奈(IGS 特任講師)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】47名

iiiiiGS 【趣旨】 本セミナーでは、米軍統治下において分断された沖縄の女性たちに対する、包括的な福祉政策を行っ た島マスの 1950 年代の活動を再検討した。米軍統治下では、米軍による植民地政策と土着の家父長制 により、沖縄の社会そのものがドメスティックな空間へと収斂され、米国の帝国拡張を支えるためのホ ームフロント(home front)として、沖縄が位置づけられていった。その過程で、沖縄の女性は、「理想 の女性像」に馴致される女性と性労働を強いられる女性へと二分化されていく。こうしたなかで、報告 者は、社会的弱者をも包括する島の活動は、沖縄フェミニズムをローカルからグローバルな連帯へ発展 させたとして再評価の余地があることを本セミナーで示した。

【開催報告】

報告者の佐喜眞彩氏は、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」を主軸としたローカルからグロ ーバルなフェミニズムの連帯の背景には、「戦後 | 沖縄フェミニズムの一前史として島マスの活動が位 置づけられると評価する。島の功績を念頭に置きつつ、島が創り上げた居場所としての「ホーム」概念 と、安全保障が示すドメスティックな空間としての「ホーム」との差異を検討すべく、本セミナーでは 議論が展開された。

佐喜眞氏によれば、米国は帝国拡張のレトリックとして、マニフェスト・ドメスティシティ(Manifest Domesticity) 概念を利用していたという。米国が植民地政策を推し進める空間では、帝国の「ホーム」 概念がゆるがないように、家庭/国家(内/外)の境界線を設定し、さらに安全保障という名目のもとに軍 事施設を設置するという人種差別と軍事戦略のプロセスが施された。この過程を経て、沖縄は米国のホ ームフロント(home front)として位置づけられてきた。 こうしたドメスティックな空間へと収斂される プロセスで生じたのが、沖縄の女性の「二元化」である。米軍が行った女性政策によって、模範的な理 想像に当てはまる「救うべき」女性と、性労働によって生き延びようとしていた「救うべきでない」女 性との間に境界線が引かれ、ドメスティックな空間に馴致されていった。こうした 1940 年代の米軍の



文化(宣撫)政策による二分化に大きく関与したのが、婦人会である。終戦直後に地域のリーダー的存在だった女教師たちが引導し立ち上げた「戦後」婦人会は、米国からの支援や軍の占領政策として教育を施す沖縄民政府文教部と連携を図った。佐喜眞氏によれば、この時点から婦人会はすでに軍と密接に結びつきがあったという。米国による宣撫政策は本格化し、1950年12月15日には琉球列島米国民政府(USCAR)が行政機関として設置されるドメスティックな空間の拡大と女性の分断の亀裂はますます大きくなる一方で、コザでは米兵相手の商売を生業にする者たちが増加し、やがて歓楽街となる。歓楽街設置に対し、当時の新聞では「堕落」や「恥」といった言葉で形容され、沖縄婦人連合会は、性産業に従事することなく「正業」に就くよう計らいを知事に要請しながらも、家庭生活への悪影響を鑑みて基本的に設置には反対であった。歴史学者である林博史や、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」の高里鈴代によれば、彼女たち「特殊婦人」は、米兵による性暴力から一般婦人を守る「防波堤」としても考えられていた。

こうした女性の二分化による帝国主義的な空間に、「ホーム」という場所を創り上げたのが「沖縄の福祉の母」と称される島マスである。島は、沖縄の女性の対米兵産業を当時の貧困の生存戦略として捉え、彼女たちをも包括した「ホーム」としての福祉施設を設立し、運営した。佐喜眞氏の主張するところは、島が提唱した「ホーム」は、米の安全保障戦略によってつくられたドメスティックな空間としての「ホーム」とは異なる意味を持つという点である。島は、40年代~50年代前半の活動として、戦災母子家庭への支援、そして子どもの福祉施設の創設に努めた。婦人会長および厚生員であった島は、売春女性の自立への道程を作ることに重きを置き、身寄りがなく帰る家のない「社会の底辺に吹き寄せられた」子どもたちの居場所つくりに奔走した。佐喜眞氏は、こうした島の生存のための最低限のライフラインから繋ぎとめようとする「ホーム」は、まさに家庭の意味を持つ「ホーム」とも、ドメスティックな空間で安全保障の倫理に裏打ちされる「ホーム」とも異なると結論付け、報告を締めくくった。

ディスカッサントの土井智義氏によるコメントでは、佐喜眞氏の論点は、沖縄のフェミニズム運動が遂げた「思想的転換」に着目した点にあるとの報告がなされた。その運動の思想を先駆けた島が行った別の「ホーム」という居場所の構築は、まさに女性間の分断を超えるものであり、沖縄のフェミニズム運動史の可能性を開いた。一方で、エイミー・カプランによるマニフェスト・ドメスティシティの参照に関しては疑念的であり、むしろカプランも外/内の境界の不安定性を強調していると述べた。加えて強調されたのは、米軍の構造的暴力による支配と、土着の家父長制が組み合わさることで、むしろ「白人男性」性が再構築され、その再構築によって女性性がどのように操作されたのかという点であった。

セミナー参加者からは、婦人会や婦人連合と軍が結びつく基盤は沖縄の明治政府による侵略からすでに構築されていたという指摘があった。加えて、土井氏が強調していた沖縄の男性性の構築に関して、対米兵の性産業従事者や、いわゆる〈アメジョ〉とよばれる米兵と交際関係を持つ女性へのバッシングが、彼らの沖縄男性性を強化しうる可能性についての意見も出た。さらに、佐喜眞氏が前提条件として掲げていたドメスティシティ概念を用いた分析手法の再検討や、安全保障における「ホーム」理論の再解釈が必要であるという指摘も見受けられた。ドメスティシティ概念は、国際関係論的な視点でforeignと domestic の関係を保つための安全保障論からなる考えであり、佐喜間氏の島マスが創り上げてきたホーム概念とこの枠組みが比較対象として合致するのか、再検討の余地がある。所定時間内を超えても議論は白熱し、沖縄フェミニズムにおける島マスの位置づけの再検討、および沖縄の男性性から裏付けられた沖縄女性の分断という新しい視点と可能性を残し、本セミナーは幕を閉じた。

記録担当:田中青葉(お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻)

IGSセミナー

「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育 本質主義の克服に向けて

【日時】2024年1月12日(金)17:00~19:00

【会場】オンライン開催 (Zoom)

【報告】

キャサリーン・レノン (ハル大学名誉教授)

レイチェル・アルソップ(ヨーク大学女性学センター講師)

【コメント】

稲原美苗(神戸大学准教授)

松永典子(早稲田大学准教授)

本山央子 (IGS 特任リサーチフェロー)

【司会】大橋史恵(IGS 准教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(同時通訳有)

【参加者数】166名

【開催報告】

「トラブルの時代」における ジェンダーの理論化と教育 一本質主義の克服に向けて一 エミニズムや性の多様性に対するポジティブな関心は、日本でも若い世代を中心に高まっているように 見えます。その一方で、「男性」「女性」に固定的な真実があるかのような本質主義的言説も強い影響力を どのように可能でしょうか。 ジェンダーを理論化し教育・議論の場を作っていくことの意味について議論します。 キャサリーン・レノン (英ハル大学名誉教授) レイチェル・アルソップ 稲原美苗(神戸大学) 松永典子(早稲田大学) 本山央子(お茶の水女子大学IGS 2024年1月12日(金)17:00-19:00 led Tim **IIIIIGS** 8問合せ:ジェンダ-研究所 igsoffice@cc.ocha.ac.jp

IGS は 2024 年 1 月 12 日(金)、英国の研究者であるキャサリーン・レノン氏(ハル大学)とレイチェル・アルソップ氏(ヨーク大学)を招き、IGS セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育~本質主義の克服に向けて」をオンライン開催した。ジェンダー理論のテキスト『Gender Theory in Troubled Times』(2019 Polity、邦訳刊行予定、以下『GTTT』)の著者であるレノン氏とアルソップ氏は、「男性」「女性」に固定的で唯一の真実があるかのようなジェンダー本質主義が「女性や LGBTQI コミュニティに対する差別の根底にある」と指摘し、ジェンダー理論と、ジェンダーに関する権利をめぐる差別や抑圧とが連動していることに気づかねばならないと訴えた。右派ポピュリズムの台頭を背景に影響力が強まる本質主義を克服するため、ジェンダーの理論化と教育はどのように行えるか―という問題意識を軸にセミナーは展開し、稲原美苗氏(神戸大学)、松永典子氏(早稲田大学)、本山央子氏(お茶の水女子大学 IGS)。

講演は、レノン氏がシモーヌ・ド・ボーヴォワールの言葉を引用し、「ジェンダー」という用語を問うことから始まった。「セックス」は生物学的、「ジェンダー」は文化的・社会的なものとして区別されることがあるが、生物学的なものと文化的・社会的なものは互いに影響し合っているため、自身は明確に区別していないと表明。「ジェンダーは地域的、文化的、社会的、歴史的に交渉されて決まるもの。ジェンダー本質主義を拒否するとき、生物学的な違いや象徴的な構造、主観的な感情を無視するのではなく、この全てをジェンダー形成の複雑な物語の中に置いている」と述べる。

『GTTT』は、ジェンダー化を生み出している社会的要素とそのプロセスを理解する "ツールキット、として、身体的な生物学的特性や資本主義、家父長制度における構造、内面化のプロセス、そしてパフ

ォーマーティブの再生産などを取り上げ、分析できるようにしたと説明。とりわけ、身体についてはボーヴォワールの考えに則って考察したとし、「ボーヴォワールは社会的なカテゴリー化がなければ、子どもたちは自分のことを性差がある生物と捉えないと言っている。性差による私たちのカテゴリー化は生物学的な違いに私たちが意味を与えた結果で、意味は変動する」と強調した。

続いてアルソップ氏は、ジェンダーを単独で考えることはできないため、『GTTT』では階級や人種、性的指向、宗教、障害、年齢といったインターセクショナリティ(交差性)を考える必要性を論じていると話した。この議論を受けてレノン氏は、二人が提起する新たなジェンダー的なアイデンティティは「社会的自己の他の側面と合わさって構成されるもの」と説明。性別や性的指向、人種、階級といった抑圧的な側面すべてに取り組む「連合政治」が必要だと主張した。

さらに、レノン氏は、右派ポピュリズムの台頭に伴うジェンダーやセクシュアリティに関する権利の 後退や差別に対抗することは、ジェンダー本質主義と厳格なジェンダー二元論に抵抗することを同時に 意味するとし、「異性愛規範的な、いわゆる核家族的な親族関係の多様化の中で、多様な関係性が正当化 され、法的・経済的支援が与えられねばならない」と述べた。

コメントでは、2004~2006年にハル大学博士課程に在籍し、レノン氏のもとでジェンダー理論と現象学を研究した稲原氏が、レノン氏の研究を貫く主なテーマとして自然主義と本質主義への懸念があると報告。ジェンダー本質主義が日常生活において再燃する中、アルソップ氏とともに『GTTT』で本質主義に反論し、「主観性における身体の役割について説得力のある形而上学を提供している」と評価した。次に、松永氏が学生にジェンダーを教える立場から、インターセクショナリティをめぐって質問。日本における難民承認率が他国に比べて著しく低く、帝国主義や植民地主義をもたらした過去の歴史と向き合わずに外国人労働者について議論している状況を批判し、「問題を認識すらできていない学生に対して、インターセクショナリティをどのように伝えたらよいのか」と尋ねた。レノン氏は、パトリシア・ヒル・コリンズが、白人女性はジェンダーによって差別されるが、人種としては特権階級であり、ある個人が特権的な立場にも抑圧された立場にも同時に置かれることがあると指摘したことを解説。この考え方が「インターセクショナリティは、私たちみんなの問題なのだと伝える上で役立つ」と応答した。

また、『GTTT』を翻訳中の本山氏は、フェミニズムに対して親和的な形態を取るジェンダー本質主義の問題性の社会共有と、ジェンダーに基づく暴力とジェンダー本質主義について質問した。特に、トランスジェンダーの人たちや人種化された男性を「危険な脅威」として安全保障の対象とするような政治に対抗するため、ジェンダーと暴力の関係についてどのように再概念化していけるかと意見を求める場面があった。最初の質問に対して、アルソップ氏は、ジェンダーに関わる不平等に対抗すると同時に、ジェンダー二元論や本質主義そのものに問いかける政治を行っていく必要があると提起。レノン氏は二つ目の質問について、ほとんどの暴力は男性から女性に振るわれている前提はあるとした上で、暴力が男性ホルモンの影響と結論づけるのは短絡的であり、生物学的見地のみからの分析は議論の展開を疎外するため、議論の単純化に抵抗するようにしようと応答した。アルソップ氏も「拡大したかたちでジェンダー暴力を理解しなければいけない」と重ねた。

セミナーには学内外から 100 人以上が参加した。終盤の質疑応答では「ジェンダーの違いに関する本質主義的な見解を持ちながらジェンダー平等は達成できるのか」といった質問が取り上げられ、活発な応答が続いた。

河原千春 (お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻)

IGS セミナー(学内限定)

リプロダクティブ・ジャスティス (性・生殖・再生産をめぐる 社会正義) の日本における政策課題と女性運動 堕胎罪・優生保護法を中心に

【日時】2024年1月25日(木)15:00~16:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604 室

【スピーカー】

大橋由香子(「SOSHIREN 女(わたし)のからだから」)

「リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社 会正義)の日本における政策課題と女性運動:堕胎罪・優生保護 法を中心に」

【コメンテーター】

新山惟乃(お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際 研究専攻)

林美子(お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研 究専攻)

【司会・進行】

高橋麻美(お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際 研究専攻)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】28名

【趣旨】

性と生殖、再生産の課題とは、妊娠や出産の際に適切な医療や支援が提供され、避妊や中絶方法へのアクセスが保障されることにとどまらず、安全で健康的な環境で子どもを育てることも含まれる。またそれらが人権として保障されることが求められる。これらの概念を総称して【リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)】と呼ぶが、このリプロダクティブ・ジャスティスをテーマに、日本の堕胎罪や優生保護法の課題に取組んできた大橋由香子氏を講師に招き、政策課題と女性運動の観点から、今私たちにとって何がリプロダクティブの課題か、何ができるか、議論する。

【開催報告】

本セミナーでは、「SOSHIREN 女(わたし)のからだから」の大橋由香子氏をスピーカーに迎え、リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)の日本における政策課題と女性運動について、講演が行われた。リプロダクティブ・ジャスティスをテーマとした当研究所の催しは、アメリカの状況に焦点を当てた昨年度開催の IGS 国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス:妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」に続いて2回目である。



大橋氏からは「リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)の日本にお ける政策課題と女性運動:堕胎罪・優生保護法を中心に|と題した報告がなされた。まず、大橋氏自身 の運動の軌跡が、性と生殖、再生産に関わる政策展開とともに紹介された。国連の動きなど国際的潮流 と照らし合わせながら、日本の主な政策、優生保護法とその改悪をめぐる攻防、母体保護法の制定の流 れが確認された。次に、リプロダクティブ・ライツとリプロダクティブ・ヘルスの概念が出てきた 1980 年代時点では、いわゆる第三世界の女性や先進国におけるマイノリティ女性が直面していた強制不妊、 危険な避妊の強要への抗議もそれらの概念に含まれていたが、徐々にそれが周縁に追いやられ、先進国 マジョリティ女性の産まない権利が前面に押し出されていったことが大橋氏によって指摘された。そし て、日本の人口政策の歴史と現状における、リプロダクティブな権利の視点に欠けた「魔のトライアン グル」として、①堕胎罪、②優生保護法(母体保護法)、③母子手帳(母子保健法)について言及した。 堕胎罪は 1880 年の旧刑法で定められ現在まで続いていること、優生保護法は人口の「質」の低下を防ぐ という戦略であったこと、母子手帳は国による母親と子どもの管理であることが、それぞれ解説された。 また優生保護法が母体保護法に改正された際に置き去りにされた問題点として、堕胎罪では中絶を禁止 する一方、優生保護法で「やって良い中絶」を医師が規定するというセットの構造に手をつけなかった ことが指摘された。その後、強制不妊訴訟について、写真や新聞記事、原告の言葉などが紹介されなが ら、詳しく紹介がなされた。また「少子化対策」の名の下で実施されてきている婚活・妊活などが国に よる性と生殖、再生産への介入だとして言及された。続いて、日本におけるリプロダクティブ・ジャス ティスの実現に向けて、障害や病気、貧困、少数民族、移民、セクシュアル・マイノリティの人びとが 突き付けられている「妊娠出産は無理」という決めつけを取り払い、誰もが生きることができるための 支援の仕組みが必要だという提言がなされた。そして、誰が生きるに値するのか、また値しないのか、 家族を作って良いのか、作ってはいけないのかについて、国や第三者がコントロールするのではなく、 自分の人生は自分で決める、選ぶことの重要性が確認された。最後に、中絶の非犯罪化、堕胎罪と母体 保護法の「配偶者同意」の廃止、安全な避妊・中絶方法の選択、中絶手術の減額などが具体的な課題と して指摘された。

続いて、新山氏と林氏よりコメントが行われた。新山氏からは、①日本における性と生殖、再生産関連の議論の欠如、②母体保護法第 14 条人工妊娠中絶の配偶者同意要件、③性と生殖、再生産に関する言葉の問題、の三つの論点が提示された。特に同氏の専門である②配偶者同意要件について、配偶者である男性の同意の有無によって「生命を尊重される胎児/されない胎児」と「罰せられる女性/罰せられない女性」が決まること、医師による中絶の抑制も生じうること、中絶するかしないかを女性が自分で決められない現状があるという指摘があった。林氏のコメントでは、優生思想の対象は障害者だけではなく、差別の階層構造に貼りついているのではないかという指摘が、アイヌ女性の妊娠時の中絶強要という事例の紹介とともになされた。また中絶へのアクセスの地域格差についても確認された。さらに女性の非正規労働の多さと賃金格差も、リプロダクティブ・ジャスティスの問題として論じていく必要性が示された。

大橋氏の講演はあらゆる内容が示唆に富むものであったが、少子化対策を性と生殖、再生産の政策課題として取り上げ、批判的検討を行ったことは、大きな意味があると考えられる。今後、リプロダクティブ・ジャスティスの日本的展開を論じる際には、この点についても落とすことなく議論を続けられたら望ましいだろう。

記録担当:大室恵美(お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻)

IGS セミナー

今日の日本におけるトランスジェンダー研究

【日時】2024年2月20日(火)14:00~15:30

【会場】国際交流留学生プラザ 2F 多目的ホール

【報告】

フランス・ローズ・ハートライン(日本学術振興会ポスドクフェロー/IGS 研究協力員)

森田真梨子(お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間発達科学 専攻)

【司会】戸谷陽子(IGS 所長/お茶の水女子大学教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語(通訳なし)

【参加者数】35名

【趣旨】

西欧圏では、日本に居住するトランスジェンダー当事者たちは、日本の法律・慣習・社会的風潮の中で抑圧され、ひたすら苦難を強いられていると認識されている。日本在住の 50 名のトランスの人々への、約1年間に渡るインタヴュー調査を行ってきた、トランス研究者で本学ポスドク研究員のフランス・ローズ・ハートライン氏が、日本のトランス当事者の帰属意識や多面性や豊かで前向きな姿勢、それらを支える文化的特有性を明らかにした分析を研究成果として報告、西欧圏の認識を覆しつつ、今後のトランス研究の方向性を論じる。

【開催報告】

2019年より本学のトランスジェンダー研究に貢献されてきたフランス・ローズ・ハートライン氏と、彼の研究助手を務める森田真梨子氏による、約1年間に渡るインタヴュー調査からは、日本のトランスの人々の見せる多様な側面や、西欧にはない日本の固有性が明らかになり、今後の研究課題をも明確に定めるものとなった。

西欧圏出身で、日本のジェンダー運動に関心を持つハートライン氏は、当事者たちの持つ帰属意識に 焦点を当てたこのプロジェクトを始めるきっかけとなった、西欧圏における日本のトランスの人々への 既存の通念をまず紹介。法律・慣習・社会的風潮の点でジェンダー多様性を認め保障しようとする西欧 圏に比べ、日本は大きく後れを取っていると認識されている。しかしながら、不十分な法整備や社会に おける誤解や差別のために、日本のトランスの人々がただただ苦難の多い毎日を過ごしているという考 えは、彼らの実態の一部を見ているだけに過ぎない。西欧圏における、トランスジェンダーであること は人生の悲劇だとする概念と、学術及びメディアの議論の中の新植民地主義的傾向へ一石を投じるべく、 ハートライン氏は以下の3点を示すことをプロジェクトの目標とした。(1)トランスジェンダーとして



生きる悦びと充足感(gender-diverse joy)が、西欧圏以外でも発見可能であること、(2) 苦難に直面している少数派の人々であっても、社会の周縁に生きることの利点を感じうること、(3) 帰属意識を持つのに、「普通であること」を達成する必要はないこと。

約1年間に渡る、日本在住の50名のトランスの人々へのインタヴュー調査から浮かび上がってきたものは、彼らが実に多様性に富んだ帰属意識を持ち、その微妙な差異は豊富で、活気に満ちているということだった。彼らの多くは、トランスジェンダーというジェンダー・アイデンティティが公的に承認されているとは言い難い状態に留め置かれているにも関わらず、自分自身の「他者性」に意味と目的を見出していたという。また、彼らのトランスジェンダーとして生きる悦びと充足感(gender-diverse joy)の在り様には、文化的背景によって明らかな差異があることも判明した。日本で育ち、流暢な英語を話さない人たちは、ほとんどが共感と結束の形で、彼らの悦びと充足感を語った。これに対し、西洋の背景を持つ人や、流暢に英語を話すゆえ、西洋の議論に触れることができる人たちは、主に自らがユニークな存在であることや、社会規範に挑戦する力が得られたことを、悦びと充足感として語ったのだ。この発見は、冒頭で紹介された西欧圏における日本のトランスの人々への既存の通念への反証となり、西欧のトランス権利運動における概念が、そのまま日本のトランスジェンダーのコミュニティに当てはまらないことへの証左となった、とハートライン氏は述べる。他者とともに互いに共通した痛みと苦難を想像し、連帯感や意味を育む文化特有の実践は、西欧圏における日本のトランスの在り方への認識に欠けているものであるという。

質疑応答では、ジェンダー研究を専攻する研究者や学生から、西欧圏と日本のトランスの人々の意識の違いはどこから来るのか等の質問が相次いだ。自らが暮らしたことのある国々の間でも、社会のジェンダー多様性への認識や医療体制にはそれぞれ違いがあるとハートライン氏は述べたが、各国や地域の文化的背景や社会情勢に切り込んだ視点が今後の研究の進展の鍵となるであろう。両登壇者も述べたように、トランスの人々が世界中で心身ともに様々な困難に直面しているのも事実である。各国や地域で当事者たちがどのように居場所を確保していくのか、そして今後もどのような帰属意識を育んでいくのか、ノルウェー帰国後にもプロジェクトを継続するハートライン氏の研究成果が期待される。

ジェンダー研究の専門家から、報告者のような一般の聴衆まで、最後まで興味深く傾聴できるセミナーであった。

記録担当:小林葵(お茶の水女子大学学務課全学非常勤講師室・外国語教育センター アカデミック・アシスタント)

▶ 2023 年度 主催 IGS 研究会詳細

IGS 研究会(学内限定)

IGS 研究協力員研究報告会

【日時】2024年3月5日(火)11:00~15:00

【会場】人間文化創成科学研究科棟 408 室

【報告】

板井広明(専修大学准教授/IGS 研究協力員)

「「ネオリベラリズムの侍女」としてのフェミニズムとその批判」

Petrice Flowers (ハワイ大学マノア校教授/IGS 研究協力員)

Doing Diplomacy: Gender, Hierarchy, and Food in US-Japan Relations 佐々木真理(実践女子大学教授/IGS 研究協力員)

「アメリカ女性作家とユートピアの表象」

仙波由加里(一般社団法人ドナーリンク・ジャパン代表理事/ IGS 研究協力員)

「配偶子ドナーの情報開示――誰のためのものか」

平野恵子(横浜国立大学准教授/IGS 研究協力員)

「インドネシア介護士資格創設からみる再生産労働者の「技能化」 ――日本への送出しを契機として」

【挨拶・コメント】戸谷陽子(IGS 所長/お茶の水女子大学教授)

【司会】嶽本新奈(IGS 特任講師)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(通訳なし)

【参加者数】15名

【趣旨】

お茶の水女子大学ジェンダー研究所では研究所に在籍している研究協力員に自身の研究紹介も兼ね て、研究報告することを義務づけている。2023 年度は板井広明氏、Petrice Flowers 氏、佐々木真理氏、 仙波由加里氏、平野恵子氏の5名が当研究所の研究協力員として研究活動を行い、その成果報告として 2024年3月5日にIGSのメンバーや学内研究者に向けてそれぞれの研究について報告した。

【開催報告】

2024年3月5日、お茶の水女子大学ジェンダー研究所の研究協力員研究報告会を開催し、2023年度 の IGS 研究協力員であった板井広明氏(専修大学)、Petrice Flowers 氏(ハワイ大学マノア校)、佐々木 真理氏(実践女子大学)、仙波由加里氏(ドナーリンク・ジャパン)、平野恵子氏(横浜国立大学)の5 名が報告した。

板井氏は「「ネオリベラリズムの侍女」としてのフェミニズムとその批判」というタイトルで報告し た。今回の報告は、2022年に出版された江原由美子氏の『持続するフェミニズムのために』(有斐閣)



のなかで取り上げられているナンシー・フレイザーの第2波フェミニズム批判に対して江原氏がフレイザーを批判的に検討している箇所をさらに板井氏が批判的に検討するといった内容であった。板井氏は江原氏の批判や議論を評価したうえで、フレイザーにはあった「自己批判」としての視点が第2波フェミニズムを生きた江原氏にはみられないことを指摘し、さらなるインターセクショナル・フェミニズムの必要性を提起した。

Flowers 氏は「Doing Diplomacy: Gender, Hierarchy, and Food in US-Japan Relations」というタイトルで報告をしたが、ここで焦点化されたものは、ガストロノミー(美食)と日米関係である。つまり、食べ物、料理、マナー、食事の場、そして物質文化を通じて日米の関係がどのように進化してきたのかがテーマであった。外交の場での食事とは、儀礼やプロトコルを通じて参加者の立場を均一化しつつ、同時にその間にある階級や地位を確認する場でもある。Flowers 氏は、日米外交の3回の晩餐を、何を食べ、どこで食べ、誰がそれを準備するのかといった点に注目し、外交における食事において中心的な役割を果たすジェンダー、ホスピタリティ、味覚に関連する問題を浮き彫りにした。

佐々木氏は「アメリカ女性作家とユートピアの表象」というタイトルで、19世紀後半から20世紀後半にかけて女性作家たちがどのような理想社会を描き出してきたのかを辿り、ユートピアに関する思想や言説がアメリカ女性作家の作品とどのように関連したのかを報告した。具体的には、19世紀後半に描かれたユートピアは女性の権利や社会的地位向上の理想郷でありつつ排他的な要素を含んでいたが、20世紀後半で描かれたユートピアは多様で包括的な社会であったという。この背景には、第一派女性運動の限界と優生学思想の影響、そして第二波以降の女性運動の興隆があったと分析された。

仙波氏は「配偶子ドナーの情報開示――誰のためのものか」というタイトルで報告をした。ドナーリンクとは、生殖補助医療で生まれた人と過去に精子や卵子を提供したドナー、または同一のドナーから生まれた人同士を結びつけることを指すが、その際にはドナーや出生者の情報やその情報開示が必要となる。提供配偶子で生まれた人の出自を知る権利は1989年の「児童の権利に関する条約」によって保障されるべきというコンセンサスが広がりつつあるが、日本においてはまだその権利保障が十分でないことが報告された。仙波氏は、法律の欠如による諸問題を紹介し、日本における法律の整備とドナーリンクへの社会的理解の深まりの必要性を提起して報告を締めくくった。

平野氏は「インドネシア介護士資格創設からみる再生産労働者の「技能化」」というタイトルで報告をした。インドネシアは 1979 年から移住労働者送出しを国家開発政策と位置づけ、現在では再生産労働者送出し国として大きな位置を占めているが、そのインドネシアで「技能の低さが人権侵害につながる」というロジックで「技能化」が勧められているという。しかしこの「技能化」はあくまで社会構築的な概念であり、受入国の文脈に著しく依存し、かつジェンダー化されていることがすでに指摘されている。平野氏は「雇用主定義による技能」のインドネシアにおける展開について、介護士資格創設という近年の出来事に注目し、それに関わる2つの事例から分析し報告した。

5人からの非常に興味深いテーマとそれに関連する問題提起に、参加者の間からも様々な質問やコメントが寄せられ、活発で意義のある議論が交わされた。

記録担当:嶽本新奈(IGS 特任講師)

▶ 2023 年度 IGS 共催イベント-

出版記念シンポジウム

『キャリアに活かす雇用関係論』を読んで・使う ジェンダー視点を貫く授業

【日時】2024年3月2日(土)15:00~17:00

【会場】ハイブリッド開催(お茶の水女子大学国際交流留学生プラザ 2 階多目的ホール、Zoom)

【司会進行】

金井郁 (埼玉大学)

【執筆者からの報告】

『キャリアに活かす雇用関係論』の特徴 駒川智子(北海道大学)

「1章 大卒就職・大卒採用」筒井美紀(法政大学)

「3章 賃金」 禿あや美 (跡見学園大学)

「4章 昇進」大槻奈巳(聖心女子大学)

「7章 ハラスメント」申琪榮 (お茶の水女子大学)

「9章 離職・転職」林亜美(神田外語大学)

「13章 いろいろな人と働く」田瀬和夫・真崎宏美(SDGパートナーズ)

【コメント】

朴峻喜(立教大学)

佐野嘉秀 (法政大学)

【主催】社会政策学会ジェンダー部会、金井郁研究室(埼玉大学)

【共催】ジェンダー研究所



IGS 共催研究会

国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー(IMAGE)分科会

仏・旧植民地出身移民女性を中心化する予示的政治の空間 政治的連帯の隠された戦術

【日時】2023年10月28日(土)14:30~17:30

【会場】ハイブリッド開催(お茶の水女子大学国際交流留学生プラザ3階セミナー室、Zoomウェビナー)

【報告者】

田邊佳美(東京外国語大学)

【司会】

伊藤るり (津田塾大学)

【コメント】

森千香子 (同志社大学)

徐阿貴(福岡女子大学)

【主催】

国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー (IMAGE) 分科会

【共催】

ジェンダー研究所

科研費基盤研究(B)「日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究」 (課題番号:23H00888)



2023 年度グローバル女性リーダー育成研究機構主催国際シンポジウム

女性学長国際シンポジウム

アカデミアにおける女性のリーダーシップと DEI 女性学長が目指す 21 世紀に輝く大学教育

【日時】2024年3月15日(金)13:30~15:30

【会場】ハイブリッド開催 (お茶の水女子大学共通講義棟 2 号館 201室、Zoom ウェビナー)

【開会挨拶】

石井クンツ昌子(グローバル女性リーダー育成研究機構長/ジェンダード・イノベーション研究所長)

【来賓挨拶】

鷹野景子(東京家政学院大学 学長)

矢口悦子(東洋大学 学長)

ポーラ・ジョンソン (ウェルズリー大学 学長 (米)) 【ビデオメッセージ】

【講演】

パオラ・ベルナルディ (コッレージョ・ヌォーヴォ学長 (伊)) エリザベス・ブラッドレー (ヴァッサー大学 学長 (米))

佐々木泰子(お茶の水女子大学 学長)

【質疑応答モデレーター】山腰京子(お茶の水女子大学国際担当評議員/外国語教育センター長)

【閉会挨拶】 西村純子 (グローバルリーダーシップ研究所長)

【総合司会】戸谷陽子(ジェンダー研究所長)

【主催】グローバル女性リーダー育成研究機構

(グローバルリーダーシップ研究所 ジェンダー研究所 ジェンダード・イノベーション研究所)

【後援】内閣府男女共同参画局

【協力】全国ダイバーシティネットワーク組織 東京ブロック

【言語】日英(同時通訳有)

【参加者数】対面:64 名、オンライン:80 名

開催報告書はグローバルリーダーシップ研究所より、以下のリンク先にて 2024 年秋以降に公開予定である。

https://www.cf.ocha.ac.jp/igl/j/menu/publication/d009813.html



▶ 2023 年度 後援イベント-

日本フェミニスト経済学会 2023 年度大会 フェミニスト経済学とローカリティ 移動の自由と生き方の幅

【日時】2023年7月29日(土)10:00~18:00

【会場】福岡女子大学 講義棟 C102~103

【座長】小川真理子(東京大学)・大野恵理(獨協大学)

【報告】

大野聖良(お茶の水女子大学)

「在留資格「興行」とは何だったのか?——日本における「移住労働とジェンダー」を考える」

日下部京子 (アジア工科大学院大学・タイ)

「タイの移民労働者たちによる居場所作り ジェンダー視点から の考察 |

佐野麻由子(福岡県立大学)

「九州在住ネパール地域研究者の経験から考えた「移動の自由と 生き方の幅」」

中島ゆり(長崎大学)

「地元を離れない若者たち」

【コメント】

堀内光子(公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム)

【座長コメント】大野恵理、小川真理子

【主催】日本フェミニスト経済学会

【後援】公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム、お茶の水女子大学ジェンダー研究所



4.

国際研究ネットワーク

- 1) 国際的な共同研究・研究交流
- 2) INTPART および UTFORSK プロジェクト
- 3) 国内外招聘研究者一覧

1) 国際的な共同研究・研究交流

■ジェンダー研究所所属の研究者が 2023 年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

海外研究者氏名	所属機関(職位)
黄長玲	国立台湾大学(教授)
楊婉瑩	台湾国立政治大学(教授)
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所(研究委員)
Jiso Yoon	韓国女性政策研究院国際協力センター(センター長)
Devin K. Joshi	Singapore Management University(准教授)
日下部京子	アジア工科大学院大学(AIT)(教授)
Jung Hwan Lee	ソウル大学(准教授)
Eun Jeong ChoE	韓国国家安保戦略研究院(研究員)
Ji Hyung Lee	淑明女子大学 (教授)
Eun Kyung Lee	ソウル大学(准教授)
Celeste Arrington	George Washington University(准教授)
Kazue Harada	Miami University (Associate Professor)
Sunyoung Yang	The University of Arizona (Assistant Professor)
Andrea Gevurts Arai	University of Washington (Assistant Professor)
Chong Eun Ahn	Central Washington University (Associate Professor)
Lin Li	University of St. Thomas (Assistant Professor)
Belinda Qian He	University of Oklahoma (Assistant Professor)
鐘仁耀	華東師範大学(教授)
李晶	華東師範大学(副教授)
張継元	華東師範大学(講師)
王橋	中国社会科学院(研究員)
Petrice R. Flowers	University of Hawai'i—Mānoa (Professor, Political Science)
Rachel Alsop	University of York (Director, Centre for Women's Studies)
Kathleen Lennon	University of Hull, (Professor Emeritus)
Annika Clasen	Heinrich-Heine-University Duesseldorf
Nicole Wegner	University of Auckland (School of Social Sciences)
france rose hartline	日本学術振興会外国人特別研究員

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

アジア工科大学院大学 (AIT) 環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

【担当】日下部京子(AIT 教授)、申琪榮(IGS 教授)、嶽本新奈(IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」(本学と AIT の博士前期課程の院生が双方の国を訪問し、研究調査ならびに研究交流を行う短期交換研修プログラム)を 2001 年の開始時から毎年、ジェンダー研究所とともに運営しているほか、所属教員らが研究交流を続けている (本報告書 54 頁参照)。

韓国女性政策研究院

【担当】申琪榮(IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 9 月 1 日~30 日まで Visiting Scholar として招聘を受ける。同院開催の国際フォーラムにキーノートスピーカーとして登壇したほか、研究プロジェクトに関する諮問など、2023 年度も各種の研究プロジェクトに参与した。

韓国ジェンダー政治研究所

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

当研究所理事を務める。2016 年~2018 年に韓国研究財団から助成金を受託し、共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表性の性差に関する公式・非公式的制度要因分析:韓国・日本・台湾比較分析」。

ソウル大学日本研究所

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

学術雑誌『日本批評』海外編集委員を務める。

西江大学社会科学研究所

【担当】申琪榮(IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

『社会科学研究』編集委員。

釜山大学女性学研究所

【担当】申琪榮(IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

『女性学研究』編集委員。

イギリス政治学会学術雑誌 Politics

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

Politics 編集委員。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

華東師範大学

【担当】大橋史恵(IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化 B)「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」の分担者として現地研究者との協力において調査を実施している。

中国社会科学院

【担当】大橋史恵(IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化 B)「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」の分担者として現地研究者との協力において調査を実施している。

ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター

【担当】石井クンツ昌子(お茶の水女子大学理事・副学長/グローバル女性リーダー育成研究機構長)、戸谷陽子(IGS 所長)、小玉亮子(IGS 研究員)、仙波由加里(IGS 研究協力員)、吉原公美(お茶の水女子大学リエゾン・URA センターリサーチ・アドミニストレーター)、佐野潤子(IGS 研究協力員)ほか 【共同研究・研究交流の概要】

ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 INTPART による共同プロジェクト(2019 年 4 月~2023 年 9 月)により、共同研究、研究者および大学院生の相互派遣、国際シンポジウム・セミナー・ワークショップ開催などの事業を展開。ノルウェー高等教育・技能局(HK-dir)の UTFORSK 助成金プロジェクト(2021 年 8 月~2025 年 7 月)とバーチャル・エクスチェンジ/COIL パートナーシップ・イニシアチブ(2023 年 3 月~12 月)の活動も並行して実施している(本報告書 51 頁参照)。

【国内外関連研究会】

- ○政治代表におけるジェンダーと多様性研究会(Women and Diversity in East asian political Representation (WondeR)) (申)
- ○日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会(申)
- ○国際移動とジェンダー研究会(大橋)
- ○経済理論学会分野別分科会・ジェンダー(大橋)
- O International Studies Association: Feminist Theory and Gender Studies (FTGS) (本山)
- O Gender and Diplomacy (GenDip) (本山)
- ○**国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク** ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加 ほか

2) INTPART および UTFORSK プロジェクト

国際比較研究とその最新成果を研究教育に応用する国際共同事業

INTPART プロジェクト

ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 International Partnerships for Excellent Education, Research and Innovation (INTPART) による、Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) プロジェクト。ノルウェー科学技術大学 (NTNU) のジェンダー研究センターと IGS とで、2019 年 4 月~2023 年 9 月の期間、教員・研究者・院生の相互派遣および、ノルウェーと日本のジェンダー平等についての比較研究、セミナーやワークショップの開催などを進め、共同研究の成果を書籍として刊行。

2023 年度 INTPART プロジェクトメンバー

《NTNU》グロ・コースニス・クリステンセン(学際的文化研究学部長・教授:プロジェクトマネージャー)、ジェニファー・ブロンラ(准教授:プロジェクト・コーディネーター)、プリシラ・リングローズ(教授)、シリ・エイスレボ・ソレンセン(ジェンダー研究センター長・教授)

《IGS》石井クンツ昌子(お茶の水女子大学理事・副学長:本学側代表)、戸谷陽子(IGS 所長/基幹研究院人文科学系教授)、小玉亮子(IGS 研究員/基幹研究院人間科学系教授)、吉原公美(リサーチ・アドミニストレーター:事務局)、仙波由加里(IGS 研究協力員)、佐野潤子(IGS 研究協力員/東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科教授)

UTFORSK プロジェクト

INTPART の実績が評価され採択されたプロジェクト。ノルウェーDIKU: Norwegian Agency for International Cooperation and Quality Enhancement in Higher Education の助成を受け、ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築するプロジェクトを展開 (2021 年 8 月~2025 年 7 月)。学生、若手研究者、教員が、パートナー大学での共同セミナーや共同指導を経験するなど、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。研究発表や産学連携への参与など若手研究者への機会提供や、論文の共同執筆など研究者同士の将来的なパートナーシップ発展につながる活動も行う。また、SDGs のジェンダー・ダイバーシティ関連の目標達成に資する成果を目指す。

2023 年度 UTFORSK プロジェクトメンバー

《NTNU》グロ・コースニス・クリステンセン(学際的文化研究学部長・教授:プロジェクトマネージャー)、ジェニファー・ブロンラ(准教授:プロジェクト・コーディネーター)、プリシラ・リングローズ(教授)、シリ・エイスレボ・ソレンセン(ジェンダー研究センター長・教授)

《IGS および本学》小林誠(基幹研究院人間科学系教授)[本学側代表]、戸谷陽子(IGS 所長)[本学側プロジェクト・コーディネーター]、石井クンツ昌子(理事・副学長)、岡村利恵(グローバルリーダーシップ研究所特任講師)、吉原公美(リサーチ・アドミニストレーター)

3) 国内外招聘研究者一覧

■ 2023 年度 海外からの招聘研究者

Carol Harrington(ヴィクトリア大学・ニュージーランド)

IGS 国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」(25 頁参照)

Kathleen Lennon (ハル大学・英)

IGS セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育」(34 頁参照)

Rachel Alsop (ヨーク大学・英)

IGS セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育」(34 頁参照)

■ 2023 年度 国内招聘研究者

工藤晴子 (神戸大学) IGS 国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」(25 頁参照) 嶺崎寛子 (成蹊大学) IGS 国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」(25 頁参照) 青山薫 (神戸大学) IGS 国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」(25 頁参照) 影本剛 (立命館大学ほか) IGS セミナー「トランス排除を乗りこえるみんなのフェミニズム」(28 頁参照) 井谷聡子 (関西学院大学) IGS セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題」(31 頁参照)

平山亮 (大阪公立大学) IGS セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題」(31 頁参照) 松永典子 (早稲田大学) IGS セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題」(31 頁参照)、「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育」(34 頁参照)

佐喜眞彩(立教大学ほか) IGS セミナー「「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とその可能性」(32 頁参照)

土井智義(明治学院大学)IGS セミナー「「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とその可能性」(32 頁参照)

稲原美苗(神戸大学)IGS セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育」(34 頁 参照)

5.

若手研究者の育成

- 1) AIT ワークショップ
- 2) 大学院における次世代研究者育成
- 3) 専任・特任教員担当講義

1) AIT ワークショップ

ジェンダー研究所が運営主体を務める国際研究交流プロジェクト

タイのアジア工科大学院大学(AIT)とジェンダー研究所による若手研究者国際交流プログラム

AIT ワークショップは、ジェンダー研究所と、タイのアジア工科大学院大学 (Asian Institute of Technology (AIT)) とにより実施されている、国際研究交流プログラムである。

2001 年に、ジェンダー研究センター(現ジェンダー研究所)所属教員と、AIT「ジェンダーと開発」 専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められ、2004 年には、本学と AIT との間で大学間学術交流 協定が結ばれた。以降、協定に基づき、日本ではジェンダー研究所が、タイでは AIT・環境資源開発研 究科が運営主体となり、AIT で実施されるワークショップへの本学院生派遣と、AIT 大学院生の日本国 内での研修受入による、国際研究交流事業をほぼ毎年実施している。お茶大ではもっとも歴史が長い国 際研究交流プログラムである。

2009 年度からは、AIT ワークショップ・プログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013 年度はサマープログラムを活用して AIT 院生の日本国内研修を実施し、2014 年度からは大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」(2020 年度から「研究方法論コースワーク(フィールドワーク)」)を国内事前研修として取り入れた。

AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ			
2001	Gender and Development			
2002	Gender, Work and Globalization			
2003	Women, Globalization and Home-based Work			
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand			
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women			
2006	〔実施せず〕			
2007	Gender, Rights and Empowerment			
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives			
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis			
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan			
2011	Gender and Disaster〔特別プログラム:本学でのシンポジウム開催〕			
2012	Sexuality			
2013	Global Justice, Women's Health and Prostitution			
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment			
2015	Labor, Sexuality and Empowerment			
2016	Labor and Association from Gender Perspective			
2017	Sexual minority and migrant workers from gender perspectives			
2018	Power and Sexuality from Gender perspectives			
2019	Gender and Empowerment in Urban Space			
2020、2021	〔院生派遣は見送り〕			
2022	Education from intersectional Perspective			
2023	After Covid-19			

大学院講義「国際社会ジェンダー論」での学習とグローバルなフィールドでの実践・交流

本ワークショップの日本からの参加者は、春学期に大学院科目「研究方法論コースワーク(フィールドワーク)」を履修し、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査方法を学ぶ。その後にアジア諸国の将来を担う多彩な人材が集う AIT での研修に参加し、フィールドワークに基づく研究の基礎を実践的に学習する。また各国の院生たちとワークショップで研究交流することで、彼らの熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから研究者としての刺激を得る。帰国してからはジェンダー研究所所属の特任講師が担当する「国際社会ジェンダー論」(本報告書 58 頁参照)にて、タイで得た知見を共有し、国際社会におけるジェンダーの問題の理論的検討を通じて、さらに理解を深める。また参加者は毎年、タイでの研修内容を報告書にまとめている。

ジェンダー研究所は、このような大学院生の国際研究交流プログラムを提供し、大学院生の教育カリキュラムを補強することで、次世代のジェンダー研究者、あるいは、NGOや国際機関で国際協力の仕事につく人材の養成に持続的に取り組んでいる。

■2023 年度 AIT ワークショップについて

AIT ワークショップへの本学院生の参加者は、まず国内事前研修に相当する「研究方法論コースワーク(フィールドワーク)」の授業をとり、AIT への派遣に備えて学ぶこととなる。

7月に AIT 院生が来日をしたが、本年度の AIT 院生たちの研究テーマは、移民や難民、そして外国人労働者についてであった。そうしたテーマに合わせて IGS 所属教員と、学外の関連団体や研究者からも多大なる協力を得て、日本における難民、移民、外国人労働者の政策と実態、そしてそれらと交差する形でのリプロダクティブ・ヘルス/ライツやセクシュアリティ、ジェンダー差別などの具体的な状況を学ぶプログラムを組み、インタビューやフィールドワークを実践する機会を設けた。プログラム参加の本学院生はすべての日程でサポートに入り、適宜、通訳や説明の補足を行なったが、これもまたこのプログラムならではの実践の一つである。

8月末からは本学院生がタイへと派遣され、AITの日下部京子教授のもとで組まれた充実したプログラムに沿って研修を行ってきた。本年度は11名という過去最多の参加者だったが、しっかりと問題意識を持った院生たちは自身の関心に基づいたインタビューをし、各種レクチャーを受け、貴重な経験を積んできた。日本とタイからの参加者によるそれぞれの報告会では、充実したフィールドワークの成果が報告され、質疑応答も活発に行われた。

タイからの帰国後に本学の参加者たちは「国際社会ジェンダー論」で、タイでのフィールドワークや AIT での学びを言語化し、報告会と報告書作成に向けて共同作業で準備を進めていった。これは派遣されたという経験で終わらせることなく、その経験を咀嚼し、グローバルな流れの中に位置づけ直し、自身の見聞きした情報を体系づけていく作業を通してより理解と思索を深める機会を得るためである。

「ジェンダーと開発(Gender and Development: GAD)」にかかわる課題群の分析方法や視座、また海外におけるフィールドワークの基礎を学ぶことが目的の本プログラムによって、参加者は国際協力や開発援助、市民運動に直に触れ、フェミニスト視点から議論する機会を得ることができたといえるだろう。

2) 大学院(人間文化創成科学研究科)における次世代研究者育成

ジェンダー研究所はジェンダーの視点から学際的・国際的な研究を推進する次世代の研究者育成も行っている。IGS 所属教員の指導のもと、2023 年度は以下の院生が博士前期課程・博士後期課程を修了した。

2023 年度 博士前期課程 (ジェンダー社会科学専攻) 修了者

● IGS 所属教員が主査を務めた 2023 年度博士前期課程修了者と論文タイトル

【氏名】河 裕珍

【主查】申 琪榮 (IGS 教授)

【修士論文タイトル】

日本における同性婚の可能性と同性パートナーシップ制度 ——婚姻制度と家族制度の排他性に着目して——

【要旨】

本論文は同性間の結婚を排除している制度を明らかにすることで、なぜ日本では同性婚が法制化されないのか、特に制度的阻害要素を明らかにすることを目的とした。主に文献研究を通じてアメリカと台湾の事例及び自治体間の制度の比較を行ったうえで、日本の結婚制度及び家族制度の歴史を整理し、戸籍制度の排他性について歴史研究と裁判事例を中心にまとめた。また同性パートナーシップ制度について整理し分析を行った。結論として、日本の結婚制度、家族制度、戸籍制度は同性婚を排除していることが分かった。

● IGS 所属教員が副査を務めた 2023 年度博士前期課程修了者と論文タイトル

【氏名】山本 菜々美

【副查】申 琪榮 (IGS 教授)

【修士論文タイトル】

現代日本における中国人への排外主義 ――保守論壇誌における中国人表象の分析から ――

【氏名】GUAN CHUXUAN

【副查】大橋 史恵(IGS准教授)

【修士論文タイトル】

現代中国の男性性の変容と多様化

【氏名】YAO YICHEN

【副查】大橋 史恵(IGS准教授)

【修士論文タイトル】

授乳期における女性の身体と家庭空間の関係 ——中国北京市・天津市を事例に ——

● IGS 所属教員が副査を務めた 2023 年度博士前期課程修了者と論文タイトル

【氏名】LEE HUI WERN

【副查】大橋 史恵(IGS 准教授)

【修士論文タイトル】

日本社会における「同性愛」と「老い」に関する研究

【氏名】ZHAO WENQI

【副查】大橋 史恵 (IGS 准教授)

【修士論文タイトル】

中国の離婚救済制度の適用状況について ――シングルマザー女性に対する調査から ――

2023 年度 博士後期課程 (ジェンダー学際研究専攻) 学位取得者

● IGS 所属教員が主査を務めた 2023 年度博士後期課程学位取得者と論文タイトル

【氏名】高橋 加織

【主查】大橋 史恵 (IGS 准教授)

【博士論文タイトル】

経済のグローバル化の下での越境的接客労働とジェンダー — クアラルンプールにおける現地採用日本人女性ホテルスタッフの事例——

【要旨】

本研究は、マレーシア・クアラルンプールとその近郊に立地するインターナショナル・ホテル・ブランドの傘下の高級ホテルに勤務する日本人女性スタッフの労働のありかたを「越境的接客労働」と位置付け、その労働の実態を明らかにする実証分析である。クアラルンプール大都市圏の高級ホテルで観察を実施するとともに、現地採用スタッフとして接客労働に従事する日本人女性 10人に半構造化インタビューを行なった。

日本人女性ホテルスタッフは、日本とは異なる言語文化圏の出身者である関係者との対人的な衝突・ 交渉を必要とし、またマレーシアに渡航する日本人顧客を専門的にサポートするために雇用されていた。 彼女たちはリブイン(ホテルに住み込みで働くこと)で働き、日本人出張者の労働力再生産を引き受け ており、「やりがい」を重視する規範を内面化した状態で中抜け勤務やオンコール就労に対応していた。 この点で彼女たちは、マレーシアにありながらも日本企業の労働慣行を再現する「飛び地」のような労 働関係におかれていた。また、その「飛び地」の形成は、日本人出張者らのマレーシア滞在における軋 轢や摩擦を、緩和しあるいは軽減する役割を果たしていた。

3) 2023 年度 IGS 専任・特任教員担当講義

《人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻》

申琪榮 (教授)

比較政治論(前期) 比較政治論演習(後期)

大橋史恵 (准教授)

ジェンダー学際研究報告(発展)(通年不定期) ジェンダー政治経済学(前期) ジェンダー政治経済学演習(後期)

《人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻》

申琪榮 (教授)

フェミニズム理論の争点(前期) 国際社会ジェンダー論演習(前期) ジェンダー立法過程論(後期)

大橋史恵 (准教授)

ジェンダー社会経済学(前期) ジェンダー社会経済学演習(後期)

嶽本新奈 (特任講師)

国際社会ジェンダー論(後期) ※(本報告書 54~55 頁「AIT ワークショップ」参照)

《学部》

戸谷陽子 (教授)

英文学特殊講義VI(後期)

申琪榮 (教授)

ジェンダー8 政治・政策とジェンダー (後期)

大橋史恵 (准教授)

アジア社会とジェンダーII (前期) グローバル化と社会 (後期) グローバル文化学実習II (通年不定期) グローバル文化学総論 (前期) 文化変動論II (前期)

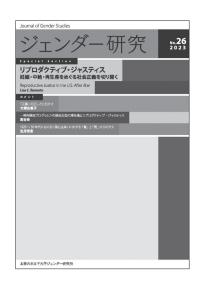
6.

学術成果の発信

- 1) 学術雑誌『ジェンダー研究』
- プロジェクト報告書 IGS Project Series

1)『ジェンダー研究』

『ジェンダー研究』は本研究所が編集・発行している査読付きの国際 学術雑誌で、特集論文、特別寄稿論文、投稿論文、書評から構成される。 巻頭に掲載される特集論文はその年に特に注目されたジェンダー関連の テーマについて世界第1級のジェンダー学研究者が執筆し、外部評価を 得た論文で組まれており、学術研究としての寄与も大きい。特別寄稿論 文は、編集部によるオリジナル企画として、学際的・国際的なジェンダ 一研究の成果を世に問う論文を掲載している。投稿論文は、国内外から 投稿された日本語もしくは英語の論文で、国際的に活躍する研究者によ る外部審査を経て採用された質の高い論文である。書評も近年ジェンダ ー関連分野で注目された著書をジェンダー研究および隣接分野の研究者 が評しており、最新のジェンダー研究の動向を示すものである。



『ジェンダー研究』26号(2023年7月刊行)概要

特集「リプロダクティブ・ジャスティス:妊娠・中絶・再生産をめ ぐる社会正義を切り開く」

『ジェンダー研究』26号では、「リプロダクティブ・ジャスティス:妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」を特集した。本特集は、2022年12月に開催したIGS国際シンポジウムでの議論を引継ぎ、人間の性と生殖、再生産にかかわる諸活動をとりまくジェンダー、民族、階級、障害、セクシュアリティなどが交差する構造的不平等について、米国と日本の文脈において、多様な研究領域から検討するものである。

カリフォルニア大学デービス校法学部マーティン・ルーサー・キング Jr. 教授 Lisa C. Ikemoto 氏の研究論文「Reproductive Justice in the U.S. After Roe」は、米国の社会運動の文脈において、リプロダクティブ・ジャスティスという概念が、いかにリプロダクティブ・ライツ / ヘルスという先行する概念の限界を超えようとしながらそれらと相互補完的な関係において発展してきたのかを検討するものである。妊娠中絶の権利を認めた 1970 年代の「ロー対ウェイド判決」および「ケーシー判決」を覆すことになった 2022 年 6 月最高裁におけるドッブズ判決が示唆することについて分析を行ったうえで、中絶の権利を制限する州法の拡大やキャパシティ不足といった課題に直面する中で、リプロダクティブ・ジャスティスの運動がインクルーシブで公正な社会をつくるという長期的目標に向けてどのように貢献しうるかを論じている。なお、この重要な論考に日本語でもアクセスできるよう、日本語訳を IGS プロジェクトシリーズとしてあわせてオンライン発行した。

また本特集には、シンポジウムでコメンテーターとして登壇した大橋由香子氏、高谷幸氏、宝月理恵氏によるコメントをあわせて掲載した。大橋由香子氏の「『正義』の正しさと厄介さ」は、リプロダクティブ・ライツ/ジャスティス概念を日本語に置き換える困難さについての考察を通して、日本の社会運動の課題を指摘する。高谷幸氏の「一時的移民プログラム下の移民女性の滞在権とリプロダクティブ・ジャスティス」は、外国人技能実習生の妊娠・出産をめぐって、誰が産み育てることを奨励され/阻ま

れるのかというリプロダクティブ・ジャスティスの境界の作動に注意を促す。宝月理恵氏の「1920~30年代における〈産む主体〉に対する「量」と「質」からの介入」は日本近世・近代における人口管理政策を概観し、社会規範と国家管理の下で〈産む主体〉の自己決定が行使されることを指摘している。これら異なる視角からのコメントをあわせて掲載することによって、生殖をめぐる政治の複合的な権力関係に切り込んでいくためにリプロダクティブ・ジャスティスの概念を用いていく意義を提示しうる特集になった。

投稿論文のセクションでは、厳正な審査を通過した4本の論考を掲載した。また書評セクションでは、 近年に刊行されたジェンダー・フェミニズム関連書籍の中から17冊を取り上げ、洪賢秀、熱田敬子、 永井萌子、齋藤剛、佐野麻由子、葛原千景、梁英聖、佐喜真彩、原口寛子、佐藤直子、岡本優加子、王 嘉若、山田秀頌、澤田佳世、久島桃代、中村桃子、中村雪子の各氏による書評を掲載した。

今号も多彩な執筆陣によって最先端のジェンダー研究の知見が提供される1冊となった。

■『ジェンダー研究』26号(2023年7月刊行)編集委員会

編集委員長

申 琪榮 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

編集委員

天野 知香 お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系 水野 勲 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

森 義仁 お茶の水女子大学基幹研究院自然・応用科学系

石丸 径一郎 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系 大橋 史恵 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

倉光 ミナ子 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系 脇田 彩 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

学外編集委員

三浦まり上智大学法学部金井郁埼玉大学経済学部北原恵大阪大学文学研究科板井広明専修大学経済学部

平野 恵子 横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院

仙波 由加里 一般社団法人ドナーリンク・ジャパン

Jan Bardsley ノースカロライナ大学

Karen Ann Shire デュースブルグ・エッセン大学

編集事務局

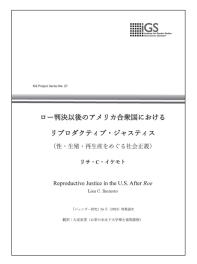
本山 央子 お茶の水女子大学ジェンダー研究所 嶽本 新奈 お茶の水女子大学ジェンダー研究所 黒岩 漠 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

『ジェンダー研究』 26 号(2023 年 7 月刊行)目次

巻頭言	申琪榮
特集:リプロダクティブ・ジャスティス ――妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り	開く
研究論文 Reproductive Justice in the U.S. After <i>Roe</i>	. Lisa C. Ikemoto
コメント	15127
「正義」の正しさと厄介さーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー	
1920~30 年代における〈産む主体〉に対する「量」と「質」からの介入	
投稿論文	
フェミニスト社会科学の科学性と政治性――フェミニスト認識論の統合的理解に即して	小野寺研太
フェミニズム理論における連合・連帯の規範的構想	
——ナンシー・フレイザーとアイリス・マリオン・ヤングの議論から	山岸大樹
Influence of Mothers on Occupational Expectations of Female University Students in Japan:	
A Comparison with the UK	Kaori Miyamoto
「拒食症のドラマ」の精神分析	и г.д.ф.д. Л
――スティーヴン・レヴェンクロン『鏡の中の少女』における身体イメージの歪み、眼差し、欲望	色 大木龍之介
書評 がはなべれないない。	
柘植あづみ著, みすず書房 『生殖技術と親になること 不妊治療と出生前検査がもたらす葛藤』	
小浜正子・板橋曉子編、京都大学学術出版会	
『東アジアの家族とセクシュアリティ 規範と逸脱』	熱田敬子
工藤晴子著,明石書店	
『難民とセクシュアリティ アメリカにおける性的マイノリティの包摂と排除』	永井萌子
鳥山純子著,春風社	
『「私らしさ」の民族誌 現代エジプトの女性、格差、欲望』	齋滕剛
杉田映理/新本万里子編,世界思想社 『月経の人類学 女子生徒の「生理」と開発支援』	佐野 麻山子
ショーン・フェイ著,高井ゆと里訳,明石書店	
『トランスジェンダー問題 議論は正義のために』	葛原千景
キャスリーン・M・ブリー著, 鈴木彩加訳, 人文書院	
『レイシズム運動を理解する 理論、方法、調査』	梁英聖
玉城福子著,人文書院	
『沖縄とセクシュアリティの社会学 ポストコロニアル・フェミニズムから問い直す沖縄戦・米軍基地・観光』	佐喜真彩
新潟県立近代美術館/国立国際美術館/東京都現代美術館編, 河出書房新社 『Viva Video! 久保田成子』	百口寅乙
『Viva Video! 八保田成士』	
『雇用形態間格差の制度分析 ジェンダー視角からの分業と秩序の形成史』	佐藤直子
レスリー・カーン著、東辻賢治郎訳、晶文社	
『フェミニスト・シティ』	岡本優加子
池田弘乃著、ナカニシヤ出版	
『ケアへの法哲学 フェミニズム法理論との対話』	王嘉若
藤高和輝著, 青土社 『〈トラブル〉としてのフェミニズム 「とり乱させない抑圧」に抗して』	山田禾陌
大野恵理著、有信堂	ДП/5/49
『「外国人嫁」の国際社会学 「定住」概念を問い直す』	澤田佳世
安井眞奈美著, 平凡社	
『狙われた身体 病と妖怪とジェンダー』	
Rika Saito 著, Peter Lang	1.1710
The Language of Feminine Duty: Articulating Gender, Culture, and Covert Policy in Modern Japan	中村桃子
Nancy Folbre 著, Verso The Rise and Decline of Patriarchal Systems: An Intersectional Political Economy	山村電子
	TTT = 1
編集方針・投稿規定	

2) プロジェクト報告書 IGS Project Series による成果刊行

ジェンダー研究所では、開催したシンポジウムやセミナーでの講演・報告内容の記録や、特別招聘教授プロジェクトの成果をまとめた報告書として、IGS Project Series を刊行している。



2023 年度は、IGS Project Series No. 27 『ロー判決以後のアメリカ合衆国におけるリプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)』を IGS の web サイトにて公開した。これは『ジェンダー研究』第 26 号特集論文「Reproductive Justice in the U.S. After Roe」(本報告書 60 頁参照)を日本語翻訳したものである。本論考の学術的ならびに社会的重要性に鑑み、広く多くの方々に読んでいただけるよう、あえて英語論文を日本語に翻訳して web で一般に公開するものである。

7.

文献収集と公開・史料 電子化・ウェブ発信

- 1) 文献・資料の収集と公開
- 2) IGS 史料電子化プロジェクト
- 3) ウェブサイト等での情報発信

1) 文献・資料の収集と公開

ジェンダー研究の知の基盤の一層の充実を図る

ジェンダー研究所は、1975年創立の「女性文化資料館」時代から今日に至るまでのほぼ半世紀にわたり、女性学・ジェンダー研究の文献・資料の収集を絶え間なく続けてきた。女性に関する膨大な知の集積ともいえる蔵書は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外から OPAC (Online Public Access Catalog) で検索でき、手続きを経れば学外の者も利用可能である。

2023 年度は、文献・資料収集とともに、古い資料の整理や書架の整備を行なった。入手しながらも、 当時は何らかの理由で OPAC 登録をせず、保管だけされていた資料について、他館の所蔵状況などから 希少なものと判断される場合は、登録を進める作業を続けている。

また附属図書館の専門コーナーには、当研究所が研究プロジェクトの一環として全国から収集してきた高等女学校関係資料が収蔵されている。日本における女子高等教育の歴史の一端を知ることができる貴重な史料の集積だが、目録や収蔵の経緯などを明かにする掲示などがこれまでなく、いわば「眠った」状態で保管されていた。今後は、利用者に関心を寄せてもらい、より活用してもらえるよう、掲示やレイアウトに工夫を加えていくことを検討している。

■附属図書館専用書架での蔵書貸出・閲覧

ジェンダー研究所収蔵文献(書籍約 25,000 冊、雑誌約 340 種)は、 お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外の学 生や研究者に利用されている。

《図書館利用案内》

○開館日

- ・月~金 8:45~21:00 (授業のない日は17:00まで)
- ・土 9:00~17:00 (夏・冬・春期休業期間中は閉館)
- · 目 12:00~17:00

○閉館日

- ・日曜日、国民の祝日、年末年始、大学夏季一斉休業日
- ・夏・冬・春期休業期間中の土曜日
- · 蔵書点検
- ・徽音祭当日、創立記念日、入学試験日当日、卒業式

※最新情報は付属図書館ウェブサイト(https://www.lib.ocha.ac.jp/)を参照。



■蔵書・研究者に関する情報提供

附属図書館収蔵文献・資料のほかに、ジェンダー研究所内にて、購入雑誌・寄贈雑誌の最新号、研究 所の過去の成果刊行物、事業の記録、所属研究者執筆の書籍のほか、全国のジェンダー研究施設や男女 共同参画団体の定期刊行物を閲覧することができる。

資料閲覧対応のほか、研究者及びジェンダーに関心を持つ方々に、これらの文献や資料、研究所に蓄積された知識を広く活用してもらうため、メールや電話による外部からの問い合わせ、訪問依頼にも随時対応している。

■お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでの資料公開

https://www.lib.ocha.ac.jp/archives/ (デジタルアーカイブズトップ)

https://www.lib.ocha.ac.jp/06/researcher.html (女性研究者名鑑)

お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでは、本学を卒業し、女性の先駆的研究者として活躍した保井コノ、黒田チカ、湯浅年子、 辻村みちよの研究業績をまとめた資料目録などが公開されている。

これらの資料は、女性文化資料館時代の 1981 年の文部省特定研究「女性高等教育とその成果に関する総合的研究」における2つのプロジェクト、「III 婦人研究者の活動状況に関する調査研究—自然科学分野を中心に—」「IV 女性文化に関する文献・資料の収集及び調査研究」の中で、それぞれのご遺族の協力を得て収集した遺品のうち、研究関連のものを整理し、長い時間を掛けて目録化したものである。

目録化は本研究所の前身機関のプロジェクト成果であるが、これを大学の歴史資産として広く公開するよう、2007~2009年にデジタルアーカイブズ化された。現在、資料現物は理学部棟内に設置された「女性科学者資料室」に保管され、その管理は、本学図書・情報課 大学資料担当(歴史資料館)が行なっている。資料閲覧や出版物への利用申請、貸出等の依頼も同担当(shiryo@cc.ocha.ac.jp)が窓口になって応じている。





2) IGS 史料電子化プロジェクト

ジェンダー研究所は 2017 年度に、「IGS 史料電子化プロジェクト」を始動した。ジェンダー研究所の前身であるジェンダー研究センター(1996 年設立)、女性文化研究センター(1986 年設立)、女性文化資料館(1975 年設立)において、所属の研究者たちが企画開催してきた研究会やセミナー、国際シンポジウム等のイベントの記録・資料を電子化し、「IGS デジタルアーカイブ」として後世に残すことで、ジェンダー研究のさらなる発展に寄与することを目的とするプロジェクトである。

■ 電子化済イベント件数

女性文化資料館時代と女性文化研究センター時代に開催されたイベントの記録は、主にカセットテープに録音された音声である。そのほかに、写真(ネガフィルムと紙焼き)と、印刷物や手書きの資料・記録等の紙媒体の史料が残されている。2017年度以来これらアナログデータの調査を進め、バラバラに保管されていた史料を過去の彙報などを参考に整理していく作業と、それと並行して個別のアナログデータをデジタルデータへと変換する電子化作業を進めてきた。2023年12月現在の電子化済イベント件数は【表1】の通りである。

【表1】電子化済イベント件数(※1.2)

時期	組織名	イベント 電子化済イベント件数				
(年度)		件数	ドキュメント (PDF)	画像 (JPEG)	音声 (mp3)	動画 (mp4)
1975-1985	女性文化資料館	75			54	
1986-1995	女性文化研究センター	137	1	23	85	
1996-2014	ジェンダー研究センター	211	4	91	101	37
2015-2021	ジェンダー研究所	130	130	130	100	30
合計		553	135	244	340	67

- ※1) 現在も調査中のため、イベント件数は今後増える見込
- ※2) 女性文化資料館時代と女性文化研究センター時代のイベント一覧は本報告書 98~102 頁参照

■ メタデータの構築とアナログデータの調査の継続

「IGS デジタルアーカイブ」をデータベースとして活用できるように、メタデータの構築に着手している。電子化した個別のイベントが、どのようなテーマで企画開催されたものであるのかを端的に明らかにするために、メタデータのカテゴリーのひとつとして「テーマ領域」を設定することとした。将来、ジェンダーの研究者がデータベースを検索する際の利便性を考慮し、電子化済イベントのテーマ領域を順次分類していく予定である。また、写真(ネガフィルムと紙焼き)、印刷物や手書きの資料・記録等の紙媒体の史料など、アナログデータの調査と整理、電子化も継続していく予定である。

3) ウェブサイト等での情報発信

ウェブサイト全体の情報整理とデザイン整備

昨年度に引き続き 2023 年度はウェブサイト全体の情報整理を進めた。日本語ページ・英語ページともに、事業所関連リンクや国内外の教育機関におけるジェンダー研究センターの情報、学会・研究会HPの情報等、ジェンダー研究に携わる機関の情報を収集し、ジェンダー研究所の国内的・国際的学術ネットワークの構築を推進した。英語ページではトップページにバナーを用意し、国際交流事業の情報・成果へ辿り着きやすいよう整備を進めた。また、不足していた研究プロジェクト概要の掲載作業を行なった。さらに、X(旧 Twitter)によるイベント告知・リマインド、YouTube によるシンポジウムのオンデマンド配信等、ソーシャルメディアを利用した情報発信に注力した。

また、日英ページともに研究プロジェクトページの階層化のための準備を進めた。具体的には、所属研究者が進める研究プロジェクト、開催イベントなどの事業、IGS Project Series 等の成果物とが相互リンクの形で閲覧できるよう整備している。今後は、事業所内だけでなく国際的学術ネットワークとの連携も推し進め、研究プロジェクトページの完成に尽力する所存である。

加えて、ウェブサイト全体の視認性を高めるために、文字フォントや色味の調整を行った。また、現状のウェブページは画像ファイルや PDF ファイルのサイズが大きい関係で読み込みが遅く、ユーザーのストレスを煽る設計になっているため、逐次データリサイズを行い軽量化を進めている。

さらに、モバイルフレンドリーなページ作成のため、文字サイズの調整やコンテンツ幅の調整を行った。今後はスマートフォンやタブレットからの閲覧を可能にすべくデザインのアップデートも検討している。これによりユーザーが求める情報を素早く簡単に見つけることができるよう、また、ウェブサイトの閲覧に慣れていないユーザーでも簡単に操作ができるよう、全体的な操作性の向上に努める。

関連リンク - お茶の水女子大学 - お茶の水女子大学/ローバルリーダーシップ研究所 - お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所 - お茶の水女子大学ジェンダード・イノベーション研究所 - AITアジア工科大学「ジェンダーと開発」専攻 - JAWS (日本―アメリカ女性政治学者シンボジウム (Japan-America Women Political Scientists Symposium) - ノルウェー科学技術大学(NTNU)ジェンダー研究センター - Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity







8 社会貢献

▶社会貢献-

ジェンダー研究所所属研究者は、行政機関が開催する男女共同参画関連講座の講師を担当したり、メディアの専門家取材に応じるなど、研究成果の社会還元に取り組んでいる。2023年度もオンラインならびに対面の講演会での講演や各種メディアの取材対応など、ジェンダー研究の成果を積極的に発信した。

■海外機関招聘講演等

申琪榮 (教授)

・ 駐新潟大韓民国総領事館主催 「韓日未来フォーラム」、講演「少子化を考えてみましょう」、信州大 学、2023 年 6 月 13 日

■ 他大学や研究機関での講演等

大橋史恵 (准教授)

・ 慶應義塾大学 2023 年度東アジア研究所講座「歴史のなかの中国社会: 疎外と連帯」第 10 回、「現代中国における女性運動の問い――「親密性」と「親密性の労働」を中心に――」、慶應義塾大学三田キャンパス、2023 年 6 月 23 日

嶽本新奈 (特任講師)

・ 日本大学芸術学部 日芸映画祭 2023「移民とわたしたち」主催 「木村荘十二監督『からゆきさん』 (1937) と日本の『からゆきさん』の歴史」、渋谷ユーロスペース、2023 年 12 月 3 日

本山央子(特任リサーチフェロー)

- · 早稲田大学 Women, Peace, and Security Workshop 講演 "A Critical Reflection on WPS Agenda"、2023 年 11 月 24 日
- ・ 明治学院大学国際平和研究所 赤十字講座「武力紛争とジェンダー」、2023年12月9日

■ 男女共同参画センターや NPO 法人等での講演

申琪榮 (教授)

- ・ 「意思決定の場にもっと女性を!」『女性政治リーダーシップ養成合宿』一社)パリテ・アカデミー 主催、福岡県男女共同参画センターあすばる、2024年3月9日
- ・ 「ポストクオータの韓国政治における女性の政治参画」国際婦人年連絡会主催、オンライン開催、 2024年2月28日
- ・ 「そうか!私のモヤモヤと政治との関係」大田区男女平等推進センター主催『私サイズの社会参画』、 2024年1月28日
- ・ 「出生率 0.78 から考える韓国の少子化対策」 福岡・女性議員を増やす会主催 女性の政治スクール、 2023 年 10 月 14 日

■ 他大学や地方公共団体の男女共同参画事業への参与

申琪榮(教授)

・ 文部科学省科学技術人材育成費補助事業 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(女性リーダー育成型)岩手大学「I.W.A.T.E. 1 in 3 女性リーダー職研究者倍増プラン」アドバイザーボード委員会 委員長

■ NPO 事業への参与

申琪榮 (教授)

・ 女性政治リーダーを養成する一般社団法人「パリテ・アカデミー」(Academy for Gender Parity) 共同代表。 一般向けオンライン講座や講演会を企画・開催。

■ 新聞等記事へのコメント提供ほか

申琪榮 (教授)

- ·『ふぇみん No.3351』2023年5月5日「女性議員を増やす気運は上がった」
- ・『南日本新聞』『山梨日日新聞』『福島民友』『岩手日報』ほか 2023年5月7日「女性最多更新 22議会」
- ・『高知新聞』ほか 2023 年 5 月 8 日「女性最多更新 22 議会」
- ・『朝日新聞デジタル』 2023 年 5 月 21 日「女性研究者増やす一手 国立大でリーダー育成 学びやすい環境 不可欠」https://www.asahi.com/articles/ASR5N7WCHR4KULUC004.html
- ・『毎日新聞』 2023 年 5 月 22 日「オピニオン ネットの名前で立候補 OK?」 https://mainichi.jp/articles/20230522/ddm/004/010/011000c
- ・『社会新報』2023年6月14日「女性議員の比率増」は地方議会から
- ・『週刊金曜日7月7日(1431)号』2023年7月7日「今週のジェンダー情報 男女格差指数 125 位の日本」
- ・『読売中高生新聞』2023年7月7日「男女格差 日本は? 閉鎖的な体質壊すには...強制力ある政策必要」
- ・『東京新聞』2023 年 9 月 13 日「女性初入閣が 3 人とも「世襲」、5 人入閣は「最多タイ」…改造内閣の人事が映す自民党の現状」https://www.tokyo-np.co.jp/article/277181?rct=politics
- ・『朝日新聞』2023 年 9 月 13 日「女性閣僚増やすには……過去最多タイも、起用に「5 人の壁」」 https://www.asahi.com/articles/ASR9F63V2R9FUTIL016.html
- ・『日本経済新聞』2023 年 9 月 14 日「女性閣僚の意味 見える景色を変えていこう」 https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCD1309S0T10C23A9000000/
- ・『佐賀新聞』2023 年 12 月 14 日「オピニオン 相克の日韓 「認識の変化、日本は正念場」」
- ・『西日本新聞』2024年1月23日「【政治とカネ わたしはこう見る】事件の背景に男性中心社会」https://www.nishinippon.co.jp/item/n/1170518/
- ・『世界 3月号』2024年3月1日「派閥政治の核心 ジェンダー化された世襲がもたらしたもの」

資料

- ① 構成メンバー
- ② 研究プロジェクト一覧
- ③ 協力研究者一覧
- ④ シンポジウム・セミナー一覧
- ⑤ 新規収蔵図書・資料
- ⑥ 電子化イベント一覧
- ⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学 ジェンダー研究所規則
- ⑧『ジェンダー研究』編集方針・ 投稿規定
- ⑨ ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー

【資料】①構成メンバー

[所長]

戸谷陽子(基幹研究院人文科学系・文教育学部教授)

[専任教員]

申琪榮(ジェンダー研究所教授)

大橋史恵(ジェンダー研究所准教授)

[学内研究員]

棚橋訓(基幹研究院人間科学系·文教育学部教授)

小玉亮子(基幹研究院人間科学系·文教育学部教授)

石丸径一郎(基幹研究院人間科学系·生活科学部准教授)

[特任講師]

嶽本新奈

[特任リサーチフェロー]

本山央子

[特任アソシエイトフェロー]

黒岩漠

[アカデミック・アシスタント]

稲垣明子

梅田由紀子

関根里奈子

滝美香

花岡奈央

和田容子

[客員研究員]

足立眞理子(お茶の水女子大学名誉教授)

[研究協力員]

板井広明(専修大学経済学部准教授)

平野恵子(横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授)

佐野潤子(東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科教授)

仙波由加里(一般社団法人ドナーリンク・ジャパン代表理事)

フランス・ローズ・ハートライン(JSPS 外国人特別研究員)

佐々木真理(実践女子大学教授)

ペトリス・フラワーズ(ハワイ大学マヌイ校教授)

《任期》

2021(R3)年4月1日~2025(R7)年3月31日

2015(H27)年4月1日~

2018(H30)年9月1日~

2021(R3)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2021(R3)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2021(R3)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023 (R5)年4月1日~2024 (R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023 (R5)年4月1日~2024 (R6)年3月31日 2023 (R5)年4月1日~2024 (R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023 (R5) 年4月1日~2024 (R6) 年3月31日

2023 (R5)年4月1日~2024 (R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023(R5)年4月1日~2024(R6)年3月31日

2023 (R5)年4月1日~2024 (R6)年3月31日

2023 (R5)年4月1日~2024 (R6)年3月31日

2023 (R5) 年 8 月 21 日~2024 (R6) 年 3 月 31 日



所長 戸谷 陽子

基幹研究院人文科学系・教授 文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コース 博士前期課程比較社会文化学専攻英語圏・仏語圏文化学コース 博士後期課程比較社会文化学専攻言語文化論領域

専門分野: 舞台芸術論、パフォーマンス研究、アメリカ演劇、文化政策、比較演劇論

所属学会等

日本英文学会

日本アメリカ文学会(東京支部評議員・編集委員)

日本アメリカ演劇学会(評議員)

日本アメリカ学会

独立行政法人大学改革支援•学位授与機構(学位審查会専門委員会座長代行)

主な業績

《競争的資金》

・科学研究費基盤研究 C(課題番号:20K00385)「米国舞台・表象空間における日本人ストックキャラクターの系譜と展開」、2020年度~2024年度、研究代表者



専任教員(教授) 申 琪榮

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻(専攻長)ジェンダー論領域 博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活科学部生活社会科学講座

専門分野:ジェンダーと政治、比較政治学(東アジア)、フェミニズム理論、 #MeToo、クオータ制、男女共同参画政策

所属学会等 International Political Science Association, American Political Science Association

European Conference on Gender and Politics, International Association for Feminist Economics 日本政治学会、日本比較政治学会、日本社会政策学会、日本フェミニスト経済学会、

「女性・戦争・人権」学会(運営委員)

ソウル大学日本研究所『日本批評』、西江大学社会科学研究所『社会科学研究』、

釜山大学女性学研究所『女性学研究』、イギリス政治学会『Politics』、ECGP 学会誌『European Journal of Politics and Gender』編集委員

『ジェンダー研究』編集長

文部科学省科学技術人材育成費補助事業 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(女性リーダー育成型) 岩手大学『I.W.A.T.E. 1 in 3 女性リーダー職研究者倍増プラン』アドバイザリーボード委員会委員長

主な業績

《論文、書評等》

申琪榮, 2024.「派閥政治の核心――ジェンダー化された世襲がもたらしたもの」、『世界』 979 (March): 52-59.

申琪榮、2023.「世襲政治はどのように再生産されるのか――イエと男性ホモソーシャル・ネットワークに着目して ――」『経済社会とジェンダー』第8巻、32-46.

申琪榮, 2024. 「第10章 半分の成功――韓国のクオータ制からの示唆」学術会議叢書 31『女性の政治参画をどう進めるか』日本学術協力財団, pp. 157-166.

申琪榮, 2024. 「第7章 ハラスメント――働く者の尊厳が保たれる仕事場を」, 駒川智子・金井郁共編『キャリアに活かす雇用関係論』, 世界思想社、pp.107-123.

申琪榮・三浦まり、2023.「対談:パリテ・アカデミーが開拓するトレーニング」、三浦まり編『政治って、面白い!』 花伝社、pp. 262-280.

申琪榮, 2024.「10-04 女性政党・政治スクール」『ジェンダー辞典』, 丸善出版

申琪榮, 2023. 「巻頭言「リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)」の視座を提案する」、『ジェンダー研究』26 号 p. 1-3

《学会報告/パネリスト》

Shin, Ki-young, Speaker at the Round Table on #MeToo Movements in East Asia, Association for Asian Studies Annual Conference, Seattle, USA. March 13-16 2024.

《学会報告/パネリスト》

Shin, Ki-young, Discussant, Low Birth and Aging Society in Korea and Japan: What Kind of "Crisis? Association for Asian Studies Annual Conference, Seattle, USA. March 13-16 2024.

申琪榮、「日本の立法過程における 2 回のジェンダー・バックラッシュ――論点と課題」韓国日本学会第 107 回 国際学術大会「東アジアのジェンダー・フェミニズムの現在」 企画パネル(招聘あり)2024 年 2 月 16 日 (韓国水原市、慶熙大学校 国際キャンパス)

《招待講演等》

・「7章ハラスメント」『『キャリアに活かす雇用関係論』を読んで・使う――ジェンダー視点を貫く授業』 社会政策学会ジェンダー部会主催他 2024年3月2日

《競争的資金》

・科学研究費基盤研究 B(課題番号:23H03654)「フェミニズム理論による新たな国家論の構築:ケア概念と安全保障概念の再構想から」、2023~2026 年度(研究代表者:岡野八代・同志社大学)、研究分担者

《企画運営国際シンポジウム》

・ジェンダー研究所主催国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」(2023年12月8日)



専任教員(准教授) 大橋 史恵

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域 博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース 文教育学部グローバル文化学環

専門分野:ジェンダー研究、国際社会学、中国地域研究

所属学会等 International Association for Feminist Economics

日本社会学会、関東社会学会、 日本フェミニスト経済学会(幹事会役員、『経済社会とジェンダー』編集長) ジェンダー史学会、現代中国学会、中国女性史研究会 経済理論学会分野別ジェンダー分科会

主な業績

《共著書》

堀口正・大橋史恵・南裕子・岩島史編著『中国と日本における農村ジェンダー研究――1950・60 年代の農村社会の変化と女性――』、晃洋書房、2024年。

《論文》

- 大橋史恵「人民公社化の下での家事・ケア労働――公共食堂と託児所を中心に――」、堀口正・大橋史恵・南裕子・岩島史編著『中国と日本における農村ジェンダー研究――1950・60 年代の農村社会の変化と女性――』、晃洋書房、pp.20-35、2024 年。
- 大橋史恵「植民地期香港における家事労働者と使用者のアクティヴィズム――境界管理のポリティクスに着目して――」『国際ジェンダー学会誌』vol.21、pp.34-61、2023 年。

《学会報告》

- 大橋史恵「植民地期香港における中国系家事労働者の移動と生存――「ケア」と「クィア」の交差に着目して―」、 日本現代中国学会第 73 回全国学術大会共通論題「現代中国語圏におけるジェンダー規範の変遷」、 神戸大学六甲台第2キャンパス、2023 年 10 月 14 日。
- 大橋史恵 2023 年度アジア政経学会大会自由応募分科会2「人民公社時期における中国農村女性と生活」、 東京大学駒場キャンパス、2023 年 6 月 11 日。(討論者)

《コラム・解説等》

- 大橋史恵「再生産領域のグローバル化」、ジェンダー事典編集委員会編『ジェンダー事典』、丸善出版、2024 年 1月、pp.246-247。
- 大橋史恵「ジェンダー研究の流れ(東アジア)(1)中国」、ジェンダー事典編集委員会編『ジェンダー事典』、丸 善出版、2024年1月、pp.14-16。
- 大橋史恵「社会主義と女性」、山口みどり・弓削尚子・後藤絵美・長志珠絵・石川照子編著『論点・ジェンダー史学』、ミネルヴァ書房、pp.216-217、2023 年 6 月。

《競争的資金》

- 科学研究費基盤研究 B(課題番号:20H01468)「新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー」、2020~2023 年度(研究代表者: 堀芳枝・早稲田大学)、研究分担者
- 科学研究費基盤研究 B(課題番号:23H00888)「日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究」、2023 年度~2025 年度(研究代表者:定松文・恵泉女学園大学)、研究分担者
- 科学研究費基盤研究 C(課題番号:19K12603)「香港における移住女性の再生産労働力配置-「グローバル・シティ」のジェンダー分析」、2019年度~2023年度、研究代表者
- 科学研究費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化B) (課題番号:21KK0033)「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」、2021~2024年度、研究分担者



特任講師 嶽本 新奈

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース

専門分野:歴史学、歴史社会学、ジェンダー研究

所属学会等 ジェンダー史学会

総合女性史学会 歴史科学協議会 女性·戦争·人権学会 社会学研究会

日本フェミニスト経済学会

【担当業務】

- ・研究プロジェクト「性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析」(17 頁参照) / 「反公害/環境運動史におけるジェンダー分析」(17 頁参照) / 「『からゆきさん』にみる性・移動・再生産領域」(20 頁参照)
- ・IGS セミナー「『戦後』沖縄フェミニズムにおける『ホーム』概念の変容とその可能性」企画・コーディネーター・司会 (32 頁参照)
- ・IGS 国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」総合司会(25 頁参照)
- ・IGS-AIT 交流事業:「AIT ワークショップ報告会」企画・コーディネーター・司会(55 頁参照)/IGS-AIT 交流事業: 『2023 年度 AIT ワークショップ実施報告書』編集担当(55 頁参照)
- ・担当セミナーのウェブサイト用報告書(各日本語・英語)の翻訳・監修
- ・『ジェンダー研究』編集スタッフ(60 頁参照)。主に特集、一般投稿論文担当。ほか『ジェンダー研究』編集刊行業務全般の統括
- ・IGS 研究協力員研究報告会、企画・コーディネーター・司会(40 頁参照)ならびにウェブサイト用報告原稿作成。

主な業績

《著書:論文》

- 2023 「ある『からゆきさん』の語りからみる女性の経験とグローバル・ヒストリー」『ジェンダー史学』ジェンダー史学会、19: pp. 21-33。
- 2024 「コラム 『からゆき』と『じゃぱゆき』」『〈ひと〉から問うジェンダーの世界史「ひと」とはだれか?――身体・セクシュアリティ・暴力』大阪大学出版会、第1巻、pp. 247。

《共訳》

2023 『「戦争ごっこ」の近現代史』人文書院、第二章「紙の戦争」担当。

《書評》

- 2023 「書評・平井和子『占領下の女性たち――日本と満州の性暴力・性売買・「親密な交際」」」、「週間読書人」、10/13 号。
- 2024 「書評・広瀬玲子『植民地朝鮮の愛国婦人会―在朝日本人女性と植民地支配』」、「週間読書人」、3/15号。
- 2024 「書評・新フェミニズム批評の会編『〈パンデミック〉とフェミニズム――新・フェミニズム批評の会創立 30 周年記念 論集』」、『PRIME』明治学院大学国際平和研究所、47 号。

《学会報告•講演》

- 2023 「『天草環境会議 40 周年への想い』」、第 40 回・天草環境会議、2023 年 7 月 8 日(天草郡苓北町コミュニティセンター)
- 2023 「『からゆきさん』に/からみる性と権力」、東北アジア歴史財団主催・2023 年日本軍「慰安婦」被害者をたたえる日記念国際学術大会、2023 年8月10日(東北アジア歴史財団、韓国ソウル)

《他大学講演》

- 2023 明治学院大学「現代平和研究 2」 ゲスト講義 10月 20日
- 2024 福岡女子大学「国際社会とジェンダー」ゲスト講義 1月9日

《競争的資金》

・科学研究費基盤研究 C(課題番号:23K11676)「『からゆきさん』にみる性・移動・再生産領域」、2023 年~2025 年度、研究代表者



特任リサーチフェロー 本山 央子

専門分野:ジェンダー研究、フェミニスト国際関係・国際政治経済学

所属学会等 日本平和学会 国際政治学会 国際ジェンダー学会 日本フェミニスト経済学会

【担当業務】

- ・研究プロジェクト「グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー」(17 頁参照) / 「日本による親ジェンダー外交の展開: 安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析」(20 頁参照) / 「フェミニズム理論による新たな国家論の構築: ケア概念と安全保障概念の再構想から」(18 頁参照)
- ・『ジェンダー研究』27 号特集国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」企画・開催コーディネーション(25 頁参照)
- ・国際セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育」企画・コメント(34 頁参照)
- ・『ジェンダー研究』 26・27 号編集(60 頁参照)
- ・海外からの問合対応・客員研究員受け入れ対応

主な業績

《著書:論文》

- 2024 「ジェンダー主流化再考——グローバル・ガバナンスの中のフェミニスト知」『歴史評論』歴史化学協議会、2024 年 3 月号(第 887), pp: 60-68
- 2024「フェミニスト外交」『ジェンダー事典』、pp:364-365. 丸善出版、2024年1月
- 2023「ジェンダー正義」日本平和学会編『平和学事典』pp:618-619. 丸善出版、2023 年 6 月

《翻訳書》

平山亮・佐藤文香・兼子歩編『男性学基本論文集』勁草書房(2024年1月刊行)(第1・7・8・9章訳、4・5・6章監訳)

《学会報告•講演》

- 2023 国際政治学会研究大会 ジェンダー部会 コメント 11月 11-13日福岡
- 2023 日本フェミニスト経済学会「フェミニスト経済学ハンドブック翻訳・出版プロジェクト」オンライン読書会「Chapter 3: Feminist Political Economy コメント、2023 年 12 月 15 日
- 2024 「フェミニスト外交:ケアの倫理か男同士の絆か?」科学研究費基盤研究 B(課題番号:23H03654)「フェミニズム理論による新たな国家論の構築:ケア概念と安全保障概念の再構想から」(研究代表者: 岡野八代)研究会報告 2024 年 3 月 1 日

《競争的資金》

- 科学研究費若手研究(課題番号:23K17134)「日本による親ジェンダー外交の展開:安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析」、2023~2027年度、研究代表者
- 科学研究費基盤研究 B(課題番号:23H03654)「フェミニズム理論による新たな国家論の構築:ケア概念と安全保障概念の再構想から」、2023~2026年度(研究代表者:岡野八代・同志社大学)、研究分担者

●学内研究員



学内研究員 棚橋 訓

基幹研究院人間科学系·教授 文教育学部人間社会科学科

人間文化創成科学研究科 博士後期課程 比較社会文化学専攻 人間文化創成科学研究科 博士前期課程 ジェンダー社会科学専攻

専門分野:文化人類学、オセアニア地域研究、ジェンダー文化論、

セクシュアリティ研究

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー



学内研究員 小玉 亮子

基幹研究院人間科学系·教授 文教育学部人間社会科学科

人間文化創成科学研究科 博士後期課程 人間発達科学専攻 人間文化創成科学研究科 博士前期課程 人間発達科学専攻

専門分野: 子ども社会学、教育学

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー

国際共同プロジェクト INTPART



学内研究員 石丸 径一郎

基幹研究院人間科学系·准教授

生活科学部心理学科

人間文化創成科学研究科 博士後期課程人間発達科学専攻発達臨床心理学領域 人間文化創成科学研究科 博士前期課程人間発達科学専攻発達臨床心理学コース

専門分野:ジェンダー心理学、認知行動療法

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー

『ジェンダー研究』編集委員

●客員研究員



客員研究員 足立 眞理子

(本学名誉教授)

委嘱期間: 2023年4月1日~2024年3月31日

研究プロジェクトタイトル

新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー(科学研究費基盤研究 B 課題番号:20H01468)

資本と身体のジェンダー分析:資本機能の変化と『放逐』される人々

●研究協力員



研究協力員 板井 広明

(専修大学経済学部准教授)

委嘱期間: 2023年4月1日~2024年3月31日

研究プロジェクトタイトル

資本と身体のジェンダー分析:資本機能の変化と『放逐』される人々

参加イベントと報告タイトル

IGS 研究協力員 研究報告会

「ネオリベラリズムの侍女」としてのフェミニズムとその批判



研究協力員 平野 恵子

(横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授)

委嘱期間: 2023 年4月1日~2024年3月31日

研究プロジェクトタイトル

日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究 (科学研究費基盤研究 B 課題番号: 23H00888)

参加イベントと報告タイトル

IGS 研究協力員 研究報告会

インドネシア介護士資格創設からみる再生産労働者の「技能化」――日本への送出 しを契機として



研究協力員 佐野 潤子

(東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科教授)

委嘱期間: 2023 年4月1日~2024年3月31日

研究プロジェクトタイトル

ノルウェーリサーチカウンシル INTPART「ジェンダー平等/ダイバーシティ:ノルウェー・日本共同研究」

●研究協力員



研究協力員 仙波 由加里

(一般社団法人ドナーリンク・ジャパン代表理事)

委嘱期間:2023年4月1日~2024年3月31日

研究プロジェクトタイトル

ノルウェーリサーチカウンシル INTPART「ジェンダー平等/ダイバーシティ:ノルウェー・日本共同研究」

参加イベントと報告タイトル

IGS 研究協力員 研究報告会

配偶子ドナーの情報開示――誰のためのものか



研究協力員 フランス・ローズ・ハートライン

(JSPS 外国人特別研究員)

委嘱期間: 2023年4月1日~2024年3月31日

参加イベントと報告タイトル

IGS セミナー「今日の日本におけるトランスジェンダー研究」

Trans Experience of Belonging in Japan



研究協力員 佐々木 真理

(実践女子大学教授)

委嘱期間: 2023年4月1日~2024年3月31日

参加イベントと報告タイトル IGS 研究協力員 研究報告会

アメリカ女性作家とユートピアの表象



研究協力員 ペトリス・フラワーズ

(ハワイ大学マヌイ校教授)

委嘱期間: 2023 年 4 月 1 日~2024 年 3 月 31 日

参加イベントと報告タイトル

IGS 研究協力員 研究報告会

Doing Diplomacy: Gender, Hierarchy, and Food in US-Japan Relations

●特任アソシエイトフェロー



特任アソシェイトフェロー 黒岩 漠

主担当業務:ジェンダー研究所事務局統括

- ・ジェンダー研究所全体予算管理
- 『ジェンダー研究』編集員
- ・国際シンポジウム等運営
- ・各種報告書・データ作成 ほか

●アカデミック・アシスタント



アカデミック・アシスタント 稲垣 明子

主担当業務:シンポジウム等運営関連

- ・ AIT ワークショップ事務
- ・研究所事業事務(大学本部各種調査対応含む)
- · 会計事務
- · IGS 史料電子化作業
- ・ 書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 梅田 由紀子

主担当業務: 文献収集・資料整理・附属図書館収蔵資料管理関連

- · IGS 史料電子化プロジェクト電子化作業管理
- · 研究所事業事務
- ・シンポジウム等運営事務
- 会計事務
- ・ 書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 関根 里奈子

主担当業務: 広報•情報機器管理

- ・ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報
- ・シンポジウム・セミナー・研究会ポスター作成
- ・ オンラインイベント開催時の Zoom Webinar ホスト担当
- ・情報機器・ネットワーク管理 IGS ウェブサイト運営技術担当、情報更新作業 ほか

●アカデミック・アシスタント



アカデミック・アシスタント 滝 美香

主担当業務:会計事務関連

- · 研究所事業事務
- ・シンポジウム等運営事務
- · IGS 史料電子化作業
- ・ 書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 花岡 奈央

主担当業務: 広報・情報機器管理

- ・ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報
- ・ オンラインイベント開催時の Zoom Webinar ホスト担当
- ・IGSウェブサイト運営技術担当、情報更新作業
- · IGS セミナーの企画・運営 ほか



アカデミック・アシスタント 和田 容子

主担当業務:成果発信関連

- · 年次事業報告書編集
- ・『ジェンダー研究』日本語原稿校閲
- · 成果発信日本語原稿校閱
- ・栞・リーフレット企画制作
- · 会計事務
- ・研究所事業事務補佐 ほか

【資料】② 2023年度研究プロジェクト一覧

1) IGS 研究プロジェクト

プロジェクト名	担当
「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	申
東アジアの越境的女性運動	大橋
資本と身体のジェンダー分析	大橋·足立·板井
性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析	嶽本
反公害/環境運動史におけるジェンダー分析	嶽本
グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー	本山
文学・芸術文化表象とジェンダー	戸谷

2)外部資金による研究プロジェクト

プロジェクト名称	期間(年度)	担当
科学研究費基盤研究 B (課題番号:23H03654) フェミニズム理論による新たな国家論の構築:ケア概念と安全保障概念の再構想から	2023~2026	申 本山 (分担者)
科学研究費基盤研究 B (課題番号:23H00888) 日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究	2023~2025	大橋 平野 (分担者)
科学研究費基盤研究 B (課題番号: 20H01468) 新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー	2020~2023	大橋 足立 (分担者)
科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化 B) (課題番号:21KK0033) 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー	2021~2024	大橋 (分担者)
科学研究費基盤研究 C(課題番号:19K12603) 香港における移住女性の再生産労働力配置:「グローバル・シティ」のジェンダー分析	2019~2023	大橋
科学研究費基盤研究 C(課題番号:23K11676) 「からゆきさん」にみる性・移動・再生産領域	2023~2025	嶽本
科学研究費若手研究(課題番号:23K17134) 日本による親ジェンダー外交の展開:安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析	2023~2027	本山

- 3)海外の助成金によるプロジェクト
- ①ノルウェーリサーチカウンシル INTPART (戸谷・小玉・仙波・佐野) 2019~2023 年度
- ② ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku の UTFORSK (戸谷) 2021 年 8 月~2025 年 7 月

【資料】③ 協力研究者一覧

氏名·所属	協力事業*	参照
【海外】		
レイチェル・アルソップ (Rachel Alsop) ヨーク大学・英	(セ)「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育	34 頁
ジャン・バーズレイ (Jan Bardsley) ノースカロライナ大学チャペルセル校米	『ジェンダー研究』編集委員	60 頁
ジェニファー・ブロンラ (Jennifer Branlat)	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	21 頁
ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	21 頁
	(連)INTPART プロジェクト	51 頁
キャロル・ハリントン (Carol Harrington) ヴィクトリア大学・ニュージーランド	(シ)グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力	25 頁
フランス・ローズ・ハートライン (France Rose Hartline) 日本学術振興会ポスドクフェロー / 2023 年度 IGS 研究協力員	(セ)今日の日本におけるトランスジェンダー研究	38 頁
グロ・コースニス・クリステンセン (Guro Korsenes Kristensen)	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	21 頁
ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	21 頁
	(連)INTPART プロジェクト	51 頁
日下部京子 (Kyoko Kusakabe) アジア工科大学院大学・タイ	(連)AIT ワークショップ	49 頁
キャサリーン・レノン (Kathleen Lennon) ハル大学・英	(セ)「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育	34 頁
プリシラ・リングローズ (Priscilla Ringrose)	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ BREGED)	21 頁
ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	21 頁
	(連)INTPART プロジェクト	51 頁
カレン・アン・シャイア (Karen Ann Shire) デュースブルグ・エッセン大学・独	『ジェンダー研究』編集委員	60 頁
シリ・エイスレボ・ソレンセン (Siri Øyslebø Sørensen)	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	21 頁
ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	21 頁

^{* (}シ) シンポジウム、(セ) セミナー・国際フォーラム、(国) 国際共同研究プロジェクト、(連) 国際ネットワーク

氏名·所属	協力事業*	参照
【国内】		
青山薫 (Kaoru Aoyama) 神戸大学	(シ)グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力	25 頁
井谷聡子 (Satoko Itani) 関西学院大学	(セ)「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題	31 頁
稲原美苗 (Minae Inahara) 神戸大学	(セ)「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育	34 頁
影本剛 (Tsuyoshi Kagemoto) 立命館大学ほか	(セ)トランス排除を乗りこえるみんなのフェミニズム	28 頁
金井郁 (Kaoru Kanai) 埼玉大学	『ジェンダー研究』編集委員	60 頁
北原惠 (Megumi Kitahara) 大阪大学	『ジェンダー研究』編集委員	60 頁
工 藤晴子 (Haruko Kudo) 神戸大学	(シ)グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力	25 頁
佐喜眞彩 (Aya Sakima) 立教大学ほか	(セ)「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とその 可能性	32 頁
土井智義 (Tomoyoshi DOI) 明治学院大学	(セ)「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とその 可能性	32 頁
平山亮 (Ryo Hirayama) 大阪公立大学	(セ)「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題	31 頁
松永典子	(セ)「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題	31 頁
(Noriko Matsunaga) 早稲田大学	(セ)「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育	34 頁
三浦まり (Mari Miura) 上智大学	『ジェンダー研究』編集委員	60 頁
嶺崎寛子 (Hiroko Minesaki) 成蹊大学	(シ)グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力	25 頁

^{* (}シ) シンポジウム、(セ) セミナー・国際フォーラム、(国) 国際共同研究プロジェクト、(連) 国際ネットワーク

Equality and Diversity (NJ_BREGED) Equality and Diversity in Norway and Japan 21 (連) INTPART プロジェクト 51 51 51 51 51 51 51 5	
(Masako Ishii-Kuntz)Equality and Diversity (NJ_BREGED)理事・副学長・グローバル女性リーダー育成研究機構(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan(連) INTPART プロジェクト51	. ==
ーダー育成研究機構 (連) INTPART プロジェクト 51	1 頁
3)	1 頁
	1 頁
(Makoto Kobayashi)	1 頁
基幹研究院人間科学系 (連)INTPART プロジェクト 51	1 頁
天野知香 『ジェンダー研究』編集委員 60 (Chika Amano) 基幹研究院人文科学系	0 頁
水野勲 『ジェンダー研究』編集委員 60 (Isao Mizuno) 基幹研究院人間科学系	0 頁
森義仁『ジェンダー研究』編集委員60(Yoshihito Mori)基幹研究院自然・応用科学系	0 頁
倉光ミナ子 『ジェンダー研究』編集委員 (Minako Kuramitsu) 基幹研究院人間科学系	0 頁
石丸径一郎 『ジェンダー研究』編集委員 (Keiichiro Ishimaru) 基幹研究院人間科学系	0 頁
岡村利恵 (国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan (Rie Okamura) グローバルリーダーシップ研究所	1 頁
脇田彩 『ジェンダー研究』編集委員 60 (Aya Wakita) 基幹研究院人間科学系	0 頁

^{*(}シ)シンポジウム、(セ)セミナー・国際フォーラム、(国)国際共同研究プロジェクト、(連)国際ネットワーク

【資料】④ シンポジウム・セミナー一覧

開催日 イベント詳細 参照

IGS 主催国際シンポジウム

12/8 国際シンポジウム

25 頁

グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力

【パネリスト】キャロル・ハリントン(ヴィクトリア大学上級講師)

工藤晴子(神戸大学准教授)

嶺崎寛子(成蹊大学准教授)

【コメンテーター】青山薫(神戸大学教授)

【モデレーター】本山央子(IGS 特任リサーチフェロー)

【総合司会】嶽本新奈(IGS 特任講師)

【開会挨拶·趣旨説明】申琪榮(IGS 教授)

【閉会挨拶】戸谷陽子(IGS 所長/お茶の水女子大学教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(同時通訳有)

【参加者数】144名

IGS 主催 IGS セミナー

7/21 トランス排除を乗りこえるみんなのフェミニズム:連帯という実践へ

28 頁

【スピーカー】影本剛(『被害と加害のフェミニズム #MeToo 以降を展望する』監訳者/立命館大学授業担当講師ほか)

【パネリスト】花岡奈央(ジェンダー研究所アカデミック・アシスタント)

森田真梨子(お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間発達科学専攻)

【司会】髙橋奏音(お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻) 鈴庄美苗(お茶の水女子大学科目等履修生/三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社公 共経営・地域政策部主任研究員)

【企画説明】申琪榮(IGS 教授)

【主催】ジェンダー研究所、「フェミニズム理論の争点」ゼミ

【後援】解放出版社

【言語】日本語

【参加者数】57名

10/20 「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題: Lennon&Alsop "Gender Theory in 31 頁 Troubled Times"を読む

【報告】本山央子(IGS 特任リサーチフェロー)

【コメント】井谷聡子(関西学院大学准教授)

平山亮(大阪公立大学准教授)

松永典子(早稲田大学准教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】7名

11/21 「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とその可能性

32 頁

【報告】佐喜眞彩(立教大学ほか非常勤講師)

【ディスカッサント】土井智義(明治学院大学国際平和研究所助手)

【司会】嶽本新奈(IGS 特任講師)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】47名

開催日イベント詳細・クロントは出ています。

IGS 主催 IGS セミナー

1/12 「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育:本質主義の克服に向けて

34 頁

【報告】キャサリーン・レノン(ハル大学名誉教授)

レイチェル・アルソップ(ヨーク大学女性学センター講師)

【コメント】稲原美苗(神戸大学准教授)

松永典子(早稲田大学准教授)

本山央子(IGS 特任リサーチフェロー)

【司会】大橋史恵(IGS 准教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(同時通訳有)

【参加者数】166名

1/25 リプロダクティブ・ジャスティス(性・生殖・再生産をめぐる社会正義)の日本における政策課 36 頁 題と女性運動: 堕胎罪・優生保護法を中心に

【スピーカー】大橋由香子(「SOSHIREN 女(わたし)のからだから」)

【コメンテーター】新山惟乃(お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻) 林美子(お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻)

【司会】高橋麻美(お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】28名

2/20 今日の日本におけるトランスジェンダー研究

38 頁

【報告】フランス・ローズ・ハートライン(日本学術振興会ポスドクフェロー/2023 年度 IGS 研究協力員) 森田真梨子(お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間発達科学専攻)

【司会】戸谷陽子(IGS 所長/お茶の水女子大学教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語(同時通訳なし)

【参加者数】35名

IGS 主催 IGS 研究会

3/5 IGS 研究協力員研究報告会

40 頁

【報告】板井広明(専修大学准教授/IGS 研究協力員)

Petrice Flowers (ハワイ大学マノア校教授/IGS 研究協力員)

佐々木真理(実践女子大学教授/IGS 研究協力員)

仙波由加里(一般社団法人ドナーリンク・ジャパン代表理事/IGS 研究協力員)

平野恵子(横浜国立大学准教授/IGS 研究協力員)

【挨拶・コメント】戸谷陽子(IGS 所長/お茶の水女子大学教授)

【司会】嶽本新奈(IGS 特任講師)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(同時通訳なし)

【参加者数】15名

IGS 共催シンポジウム

3/2 出版記念シンポジウム

42 頁

『キャリアに活かす雇用関係論』を読んで・使う:ジェンダー視点を貫く授業

【司会進行】金井郁(埼玉大学)

【報告】駒川智子(北海道大学)

筒井美紀(法政大学)

禿あや美(跡見学園大学)

大槻奈巳(聖心女子大学)

申琪榮(お茶の水女子大学)

林亜美(神田外語大学)

田瀬和夫・真崎宏美(SDGパートナーズ)

【コメント】朴峻喜(立教大学)

佐野嘉秀(法政大学)

【主催】社会政策学会ジェンダー部会、金井郁研究室(埼玉大学)

【共催】ジェンダー研究所

IGS 共催研究会

10/28 国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー(IMAGE)分科会

43 頁

仏・旧植民地出身移民女性を中心化する予示的政治の空間:政治的連帯の隠された戦術

【報告】田邊佳美(東京外国語大学)

【司会】伊藤るり(津田塾大学)

【コメント】森千香子(同志社大学)

徐阿貴(福岡女子大学)

【主催】国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー(IMAGE)分科会

【共催】ジェンダー研究所、科研費(B)「日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究」(課題番号:23H00888)

グローバル女性リーダー育成研究機構主催 国際シンポジウム

3/15 女性学長国際シンポジウム

44 頁

アカデミアにおける女性のリーダーシップとDEI:女性学長が目指す21世紀に輝く大学教育

【開会挨拶】 石井クンツ昌子(グローバル女性リーダー育成研究機構長/ジェンダード・イノベーション研究所長)

【来賓挨拶】鷹野景子(東京家政学院大学 学長)

矢口悦子(東洋大学 学長)

ポーラ・ジョンソン(ウェルズリー大学 学長(米))

【講演】パオラ・ベルナルディ(コッレージョ・ヌォーヴォ学長(伊))

エリザベス・ブラッドレー (ヴァッサー大学 学長(米))

佐々木泰子(お茶の水女子大学 学長)

【質疑応答モデレーター】山腰京子(お茶の水女子大学国際担当評議員/外国語教育センター長)

【閉会挨拶】西村純子(グローバルリーダーシップ研究所長)

【総合司会】戸谷陽子(ジェンダー研究所長)

【主催】お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構

(グローバルリーダーシップ研究所 ジェンダー研究所 ジェンダード・イノベーション研究所)

【言語】日英(同時通訳有)

【参加者数】対面:64名、オンライン:80名

IGS 後援

7/29 日本フェミニスト経済学会 2023 年度大会

45 頁

フェミニスト経済学とローカリティ:移動の自由と生き方の幅

【座長】小川真理子(東京大学)/大野恵理(獨協大学)

【報告】大野聖良(お茶の水女子大学)/日下部京子(アジア工科大学院大学) 佐野麻由子(福岡県立大学)/中島ゆり(長崎大学)

【コメント】堀内光子(公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム)

【座長コメント】大野恵理/小川真理子

【主催】日本フェミニスト経済学会

【後援】公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム、お茶の水女子大学ジェンダー研究所

【資料】⑤2023年度新規収蔵図書・資料

・2023 年度、寄贈により以下の書籍が新規収蔵された。[寄贈者名『書名』(著者名)](敬称略)

勉誠出版『アジアの出産とテクノロジー: リプロダクションの最前線』(白井千晶[編著])/タバブックス『生きるため のフェミニズム: パンとバラと反資本主義』(堅田香緒里) /洲崎圭子『《産まない女》に夜明けはこない: ロサリ オ・カステリャノス研究』(洲崎圭子) /自由国民社『LGBTQ の働き方をケアする本』(宮川直己) /金剛出版 『親子は生きづらい: "トランスジェンダー"をめぐる家族の物語』(勝又栄政) /世界思想社『月経の人類学: 女 子生徒の「生理」と開発支援』(杉田映理,新本万[編]) / 白澤社『事実婚と夫婦別姓の社会学』(阪井裕一郎) /中央公論新社『ジェンダー格差: 実証経済学は何を語るか』(牧野百恵) /佐藤 直子『女性公務員のリアル: なぜ彼女は「昇進」できないのか』(佐藤直子) /金剛出版『女性のこころの臨床を学ぶ・語る: 心理支援職のた めの「小夜会」連続講義』(笠井さつき、笠井清登[編著]、松木邦裕 [ほか執筆])/集英社『性差 (ジェンダー) の日本史』(「性差の日本史」展)/みすず書房『生殖技術と親になること: 不妊治療と出生前検査がもたらす葛 藤』(柘植あづみ)/ドメス出版『沈黙の扉が開かれたとき: 昭和一桁世代女性たちの証言』(山村淑子, 旭川歴 史を学ぶ母の会[編])/東京大学出版会『津田梅子: 科学への道、大学の夢』(古川安)/明石書店『難民とセク シュアリティ: アメリカにおける性的マイノリティの包摂と排除』(工藤晴子)/大月書店『ハッシュタグだけじゃ始ま らない: 東アジアのフェミニズム・ムーブメント』(熱田敬子 [ほか編著])/京都大学学術出版会『東アジアの家族 とセクシュアリティ: 規範と逸脱 』(小浜正子, 板橋暁[編])/日本女子大学『評伝成瀬仁蔵: 女子高等教育から 「社会改良」へ』(片桐芳雄[著])ミネルヴァ書房『論点・ジェンダー史学』(山口みどり[ほか編著])/鳥山純子 『「私らしさ」の民族誌:現代エジプトの女性、格差、欲望』(鳥山純子)

・2023 年度、寄贈、購入によりジェンダー研究所から以下の書籍が新規収蔵された。[『書名』(著者名)]

『Gender, global health, and violence: feminist perspectives on peace and disease(Tiina Vaittinen, Catia C. Confortini[編]) / 『Gender reckonings: new social theory and research』(James W. Messerschmidt[編]) / 『Her turn: why it's time for women to lead in America』(Vicki Donlan with Helen French Graves) 『Support the troops: military obligation, gender, and the making of political community(Katharine M. Millar) / 『Thai migrant sexworkers: from modernisation to globalisation』(Kaoru Aoyama) / 『The ABC's of LGBT+』(Ashley Mardell) / 『The Routledge handbook of gender and violence』(Nancy Lombard[編]) /

『沖縄とセクシュアリティの社会学: ポストコロニアル・フェミニズムから問い直す沖縄戦・米軍基地・観光』(玉城福子)/『「外国人嫁」の国際社会学: 「定住」概念を問い直す』(大野恵理)/『キャリアに活かす雇用関係論』(駒川智子,金井郁[編])/『ケアへの法哲学: フェミニズム法理論との対話』(池田弘乃)/『雇用形態間格差の制度分析: ジェンダー視角からの分業と秩序の形成史』(禿あや美)/『「社会」はどう作られるか?: 家族・制度・文化』(姫岡とし子, 久留島典子, 小野仁美[編])/『女性の暮らしと生活意識データ集 2024』(三冬社編集制作部)/『『民法論綱』抄録/男女同権論/婦女法律論(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);1)』(ベンサム[著],何礼之[訳]/ミル[著],深間内基[訳]/アモス[著],鈴木義宗[訳])/『『社会平権論』抄録(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);2)』(スペンサー[著],松島剛[訳])/『『政治談』抄録/西国婦人立志編(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);3)』(フォーセット[著],被合慥爾[訳]/スタントン[著],住田頼之助[訳])/『晩婚論/女子の本分/男女両性観(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);4)』(オーゲル[著]; 田中太郎[訳]/ラスキン[著],下田次郎[訳]/トルストイ[著],平野臥龍[訳])/『男女と天才/恋愛と芸術と天才と『ツァラトゥストラ』抄録(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);5)』(ワイニンゲル[著],片山正雄訳[著]/ショーペンハウエル[著],角田浩々[編]/ニーチェ[著],生田長江[訳])/『男女淘汰論『人類の由来』抄録(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);6)』(ダーウィン、ヘッ

ケル[著]; 山縣悌三郎[纂述]/ダーウィン[著],田中茂穂[訳])/『家族論(世界女性学基礎文献集成(明治大正 編);7)』(ボサンケー[著], 田中達[訳])/『婦人と経済(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);8)』(ステッツオン (ギルマン)[著],大日本文明協会[編])/『過渡時代の婦人(世界女性学基礎文献集成(明治大正編):9)』(ミーキ ン[著],大日本文明協会[編])/『女性中心説(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);10)』(ウォード[著],堺利 彦[訳])/『婦人と寄生(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);11)』(シュライネル[著],神近市子[訳])/『母性 の復興(世界女性学基礎文献集成(明治大正編);12)』(ケイ[著],平塚明子(らいてう)[訳])/『恋愛論(世界女性学 基礎文献集成(明治大正編);13)』(カーペンター[著],山川菊栄[訳])/『性的特徴』(世界女性学基礎文献集成 (明治大正編):14)(エリス[著],小倉清三郎[訳])/『恋愛の理学(世界女性学基礎文献集成(明治大正編):15)』(グ ールモン[著],桃井京次[訳])/『婚姻及家族の原史について(世界女性学基礎文献集成(昭和初期編);1)』(クノ ウ[著],服部之[総訳])/『婦人と家族制度/婦人労働革命: 経済の進化における婦人の労働(世界女性学基礎 文献集成(昭和初期編);2)』(コロンタイ[著],山川菊栄訳/コロンタイ[著],大竹博吉[訳])/『婦人の解放と政治/婦 人に与ふ:レーニンは労働婦人になんと呼びかけたか『マルクス主義と婦人問題』抄録/(世界女性学基礎文 献集成(昭和初期編);3)』(ドイツ共産党[編],水野正次[訳]/レーニン, ツェトキン[著],水野正次[訳]/リヤザノフ,レ ーニン[著],新城信一郎[訳])/『革命と性生活/ソヴエート・ロシヤに於ける婦人の生活(世界女性学基礎文献集 成(昭和初期編);4)』(ゲリマン[著],広尾猛[訳]/ゼシカ・スミス[著],神近市子[訳])/『英国婦人労働運動史(世界 女性学基礎文献集成(昭和初期編);5)』(バーバラ・ドレーク[著];赤松克麿,赤松明子[訳])/『解説社会主義と 資本主義 : 有識婦人のために(世界女性学基礎文献集成(昭和初期編);6)』(ショウ[著] ; 加藤朝鳥[訳]) / 『解説社会主義と資本主義: 有識婦人のために(世界女性学基礎文献集成(昭和初期編);7)』(ショウ著;加藤 朝鳥[訳])/『女性に与ふる社会主義の修正: バアナアド・ショウ氏に答ふ(世界女性学基礎文献集成(昭和初 期編);8)』(ムジユリエ著: 槇義衛[訳])/『国際プロレタリア婦人問題/国際婦人運動の現勢/新世界の建設と婦 人: 国際協同組合婦人協会の現状(世界女性学基礎文献集成(昭和初期編):9)』(「インタナショナル」編輯部 [訳]/産業労働調査所[訳・編]/フロインドリツヒ[著],日本消費組合婦人協会[訳])/『結婚の破産(世界女性学基 礎文献集成(昭和初期編):10)』(カルヴァートン[著],内山賢次[訳])/『友愛結婚(世界女性学基礎文献集成(昭 和初期編);11)』(リンゼイ[著],原田実[訳])/『婦人参政権の理論と実際(世界女性学基礎文献集成(昭和初期 編);12)』(バルテルミイ[著],星野辰雄[訳])/『母を救へ: 母性保護教程(世界女性学基礎文献集成(昭和初期 編);13)』パンカースト[著],牧賢一, 磯村英一[訳])/『知られざる軍隊:戦時に於ける婦人動員(世界女性学基 礎文献集成(昭和初期編);14)』(リューダース[著],渡邊多恵子[訳]) /『ナチス女性の生活/イタリアの女性とファ シズモ/ファシスタの母(世界女性学基礎文献集成(昭和初期編);15)』(キーフアー[著]/イタリア大使館情報官室 [著]/フィウミ[著],小山栄次郎[訳])/『大学生がレイシズムに向き合って考えてみた: 差別の「いま」を読み解くた めの入門書』(一橋大学社会学部貴堂ゼミ生&院ゼミ生有志[著])/『男女共同参画社会データ集』(三冬社編集 制作部)/『「トラブル」としてのフェミニズム:「とり乱させない抑圧」に抗して』(藤高和輝)/『トランスジェンダー 問題: 議論は正義のために』(ショーン・フェイ[著],高井ゆと里[訳])/『狙われた身体: 病いと妖怪とジェンダー』 (安井眞奈美)/『Viva video!』(久保田成子、濱田真由美 ほか「編])/『フェミニスト・シティ』(レスリー・カーン「著]、 東辻賢治郎[訳])/『妇女百科全书(上)』(《妇女之友》杂志社编)/『妇女百科全书(下)』(《妇女之友》杂志社 编)/『レイシズム運動を理解する:理論、方法、調査』(キャスリーン・M・ブリー[著],鈴木彩加[訳])

・以下の資料は、1981年ごろ、日中友好協会や斎藤きえ氏から当時の女性文化資料館に寄贈され、保管されていたが、改めて整理のうえ、「文革期~改革開放初期 中国女性関係資料」として新規収蔵された。

『迎春花咲く中国:日本主婦同盟訪中記』(日本主婦同盟) /『プロレタリア文化大革命と中国の婦人たち』(中国研究所婦人研究会) /『私の見た中国と婦人たち』(甲藤将恵) /『女 16 人中国の旅:1974 年 2-3 月訪中記』(日中友好第二次婦人代表団[編]) /『子々孫々までの友好を!』(中国婦人代表団歓迎委員会[編]) /『国際婦人年世界会議資料:1975 年 6 月 19~7 月 2 日』(日中友好婦人連絡会 [編]) /『婦人解放の中国を旅して:1975 年春』(日中友好婦人活動家代表団) /『日中友好婦人の翼第一次訪中団報告書』(日中友好婦人の翼第二次訪中団報告書』(日中友好婦人の翼第二次訪中団派遣委員会) /『日中友好婦人の翼第二次訪中団報告書』(日中友好婦人の翼第二次訪中団派遣委員会編) /『1978 年日中友好婦人の翼訪中団報告書』(1978 年日中友好婦人の翼訪中団訪中報告書作成委員会) /『婦人は天の半分を支える:訪日・中国婦人代表団との懇談』(全日通家族会東京都連絡協議会) /『長沙から大慶へ:1977.5.24-6.13』(日中友好協会(正統)中央本部派遣日中友好婦人活動家訪中団[編]) /『中国の街から村から』(北陸東海婦人友好訪中団) /『七八・中国の春:七五〇〇キロの旅』(日中友好婦人訪中団) /『中国の街から村から』(北陸東海婦人友好訪中団) /『七八・中国の春:七五〇〇キロの旅』(日中友好婦人訪中団) /『1978 年 12 月中国婦人代表団を迎えて』(東京都中国婦人代表団歓迎委員会) /『永遠(とわ)の友情:友好と親善の四日間』(歓迎実行委員会事務局[編]) /『友好をたずさえて:第一回千葉県婦人代表訪中団:石家荘・太原・大同・北京』(第一回千葉県婦人代表訪中団編集委員会[編]) /『笑顔と拍手につつまれて:你好!!再見!!』(日中友好第三次婦人の翼訪中団) /『80 年代を迎えて中国婦人はいま…』(菅沼久美 ほか[訳]、古島琴子[解説・編集]

【資料】⑥ 史料電子化プロジェクト:電子化イベント一覧

女性之	文化資料館(1	975-1985)/女	性文化研究センター(1986-1995)イベント一覧	
年度	活動区分	開催日	イベントタイトル	登壇者
1977	講演会	1977/9/22	湯浅年子先生講演会	湯浅年子
(S52)	シンポシウム	1978/1/14	シンポジウム	
	研究会	1978/2/8	山川菊栄と女性解放思想(木下 研究会)	
	研究会	1978/3/6	社会学における家族	
	研究会	1978/3/22	山川菊栄研究	
1978	研究会	1978/6/6	女性史研究会 欧米の女性論	
(S53)	研究会	1978/7/27	女性史研究会 欧米の女性論	
1979	研究会	1979/5/24	女性の教育と女性問題	
(S54)	研究会	1979/10/4	アメリカ婦人労働の法的諸問題	
	シンポシウム	1980/1/26	総合科目「婦人問題」に関するシンポジウム	
	研究会	1980/2/12	中山みきの思想と歩み一陽気づくめの世界をめざして 50 年一	吉原敬子
		1980/3/1	杉田和子、小島栄子、岩本のり子 於:中村屋	
1980	研究会	1980/4/1	平安時代の相続制と女子相続権一『平安遺文』文書を中心として一	服藤早苗
(S55)	研究会	1980/4/23	〔マーガレット・ミードの女性研究 I 〕	村松弘子ほか
	研究会	1980/5/29	〔マーガレット・ミードの女性研究Ⅱ〕	田中和子ほか
	研究会	1980/7/3	インドにおける女性の政治的役割	Chandra Mudaliar
	研究会	1980/10/18	[コペンハーゲン婦人会議及び婦人差別撤廃条約について]【婦人問題懇話会 講演会】	船橋邦子ほか
	研究会	1980/10/20	性役割とセクシズム	小林啓子
	研究会	1980/11/5	Feminist Literary Criticism からみた『砂の女』	Chigusa Kimura-Steven
	研究会	1980/12/25	目黒依子『女役割』について	田中和子ほか
	研究会	1981/2/12	アメリカの女性史	金子幸子ほか
	研究会	1981/3/27	フランス社会史の動向と女性史	小島智恵
1981	研究会	1981/5/27	人類学者のみた個人的アメリカ女性史	Frederica de Laguna
(S56)	研究会	1981/5/29	Role's of Women's College	Frederica de Laguna
	研究会	1981/6/12	『性の署名』について(1)	内藤和美ほか
	研究会	1981/7/4	『性の署名』について(2)	平川和子
	研究会	1981/7/12	高群逸枝の婚姻・家族形態研究の意義について	関口裕子
	研究会	1981/9/9	カナダの女性学について	Patricia Morley ほカュ
	研究会	1981/10/16	家族·親族理論研究動向	田中真砂子
	研究会	1981/11/25	兼業農家女性の就労形態の変容―長野県諏訪地方の場合―	久保桂子
	研究会	1981/12/15	オーストラリアと日本の婦人運動/ニュージーランドの女性の地位について	Romanovsky Ulrike ほか
	研究会	1982/1/27	千葉県における廃娼運動―国防婦人会との関連において―	船橋邦子
	研究会	1982/3/24	近現代日本の社会教育と婦人団体	木下 ユキエ
1982	研究会	1982/4/23	女子大学の存在意義を考える―アメリカ・フランス・インド等の各国を見て―	広中和歌子

(S57)	研究会	1982/5/22	女性学研究会 井上輝子、目黒依子	
	研究会	1982/6/4	近世における女性と家族	林玲子ほか
	研究会	1982/10/22	平安時代の養子制度について一日本家族の特質をテーマに一	William Mccullough ほか
	研究会	1982/11/24	バングラディシュの女性について	武藤敦子
	研究会	1982/12/13	Consort, mother, beloved, "Vamp"; the symbolic depiction of womanhood in Indian calendar art	Patricia Uberoi ほカュ
	研究会	1983/1/24	出産の社会史一家族の近代化に関連して一	落合恵美子
	研究会	1983/2/15	韓国の女性について	鄭金子ほか
	研究会	1983/3/22	『巫女の文化』について一古代女性史の見直しのために―	倉塚曄子ほか
1983	研究会	1983/5/30	ガブリエラ・ミストラルと『女性読本』について	田村さと子
(S58)	研究会	1983/6/30	Japanese-German Marriage in Japan: a fentative approach	Irene Hardach-Pinke
	研究会	1983/7/29	『性の深層』をめぐって一現代西ドイツの女性運動との関連で一	大沢三枝子
	研究会	1983/9/26	『妻と夫の社会史』について	山本郁子ほか
	研究会	1983/11/1	女性の側からジェンダーを考える	若井文恵ほか
	研究会	1983/11/21	Intellectual Differnces between Woman and Man "Inherited or Acquired?"	Virginia Mann ほか
	研究会	1983/12/15	機械女工たちの近代	古庄正
	研究会	1984/2/22	『婦女新聞』の出発	石崎昇子ほか
	研究会	1983/3/13	フィリップ・アリエス研究―子ども・教育・女性―	波多野完治ほか
1984	研究会	1984/4/24	日本の離婚間停に関する研究	Taimie Bryant
(S59)	研究会	1984/5/15	『更級日記』作者の宗教的コンプレックス	高木きよ子
	講演会	1984/5/31	お茶の水女子大学百年史刊行記念講演会	林太郎ほか
	研究会	1984/6/20	キリスト教文化と女性	杉田弘子
	研究会	1984/7/6	The Function of Libraries, Women' Centers, and "Women's Studies" in doing Feminist Research	Helen Wheeler ほかっ
	研究会	1984/10/23	『私生子』概念の発生と消長―明治期を中心とする法制・歴史と実際の扱い―	田中弘子
	研究会	1984/11/20	Woman and Nature	Susan Griffin (まカゝ
	研究会	1984/12/11	中国女性史研究―小野和子『中国女性史』を読んで―	加藤直子
	研究会	1985/2/25	樋口一葉の文学―『十三夜』と『人形の家』の比較を中心に―	フランチスカ・フンチカ
	研究会	1985/3/14	近世関東農村における女性労働者の存在形態―年季・日雇奉公人の分析から―	青木道子
1985	研究会	1985/4/26	ユートピアと性	倉塚平
(S60)	研究会	1985/5/29	西欧近代の結婚観―キルケゴールをめぐって―	野村明代
	研究会	1985/6/12	清代において模範とされている女性について	Susan Mann
	研究会	1985/6/13	食事が子供の身体と心に与えるもの	
	研究会	1985/7/4	韓国女性の政治的、社会的地位	白京男
		1985/10/5	第三世界の女性たちと私たち―ナイロビ報告(日本婦人問題懇話会)	
	研究会	1985/10/28	『源氏物語』にみる婚姻と居住形態と相続―光源氏と紫の上と明石君をめぐ る―視角―	木下ユキエ
	研究会	1985/11/15	主婦とテレビ	香取淳子
	シンポジウム	1985/11/27	産むことを考える	加藤シヅエほか
	研究会	1985/12/18	イタリア女性解放思想の歴史と今日的な段階―19 世紀末から現在に至る主要な事項―	Argnani Fausta

	研究会	1986/1/16	スイスにおける女性史研究―論文集『女性』と『イティネラ』にみる女性史家 の研究動向—	佐藤るみ子
	研究会	1986/3/3	「円地文子論―"自然な女"の周辺―」	宮内淳子
1986	研究会	1986/4/25	フランス現代女性思想の流れ―ボーヴォワール・クリスティヴァ・イリガライ	棚沢直子
(S61)	研究会	1986/6/24	日本文化における『悪女』	Valerie•L•Durham
	研究会	1986/10/3	航空史における女性の役割―ドイツ女性スポーツ史の視角から	Gertrud Pfister
	研究会	1986/11/20	韓国の家族について	徐炳淑
	研究会	1986/12/8	バングラディシュの女性―女性政策の視点から―	Jowshan Ara Rahman ほか
	研究会	1987/1/14	中東世界の女性―イスラームの原理と実像	黒田美代子
	研究会	1987/3/3	マレーシアの女性	Goh Beng Lan
1987	研究会	1987/4/23	公民の妻/青年団における女子活動の設立	渡辺洋子ほか
(S62)	研究会	1987/5/15	Impact of Economics & Technological Change on Women	Tamara · Hareven
	研究会	1987/6/24	円地文子の描いた女性像	アイリーン・マイカルス・ アダチ
	研究会	1987/7/14	家計構造の長期的変容	田窪純子
	研究会	1987/8/25	舞踊と語り祖母の語りとその姿	江川まゆみ
	研究会	1987/10/26	ラテン・アメリカの女性像	三田千代子
	研究会	1987/11/25	和泉式部と仏教	小野美智子
	研究会	1987/12/16	タイ社会における女性の役割	小野沢・ニッタヤー
	研究会	1988/2/10	日本における転勤の問題とデュアル・キャリア・ファミリーについて	青木由紀
	研究会	1988/3/10	新しい家庭科をめざして	西谷洋子
	研究会	1988/3/10	家庭科における消費者教育	小関禮子
1988	研究会	1988/4/11	Income Generation of Women in Rural Bangladesh	Kohinoor Begum
(S63)	研究会	1988/5/26	South Asian Women: Challenges & Prospects	Urmila Phadnis
	研究会	1988/6/22	Some Implications of Women's Status in China	Beverly Y. B. Hong
	研究会	1988/7/8	性役割意識に関連する韓国人の価値観	金炳端
	研究会	1988/9/7	こどもの虐待と放置―小児科の全国調査から―	内藤和美
	研究会	1988/11/25	フェミニスト研究の軌跡―Stanley & Wise の『フェミニズム社会科学に向かって』が提起するもの―	矢野和江
	研究会	1989/2/21	アジアにおける女性と仕事	Noeleen Heyzer
	研究会	1989/3/7	日本のフェミニストの意識と alternative な生活スタイル	ゴー・ベン=ラン
1989	研究会	1989/4/5	男女平等教育の実践に向けて	Peggy McIntosh
(H1)	研究会	1989/4/14	Education of Scientist who Happen to Be Women	Emily L. Wic
	研究会	1989/6/1	鎌倉期の乳父について―その存在形態と乳母との関連	秋山貴代子
	研究会	1989/6/12	Modernisation en Iran et Le Changement Socio-cultural de Role de la Femme	Nasrin F. Hakami
	研究会	1989/7/17	Problems of Homeless Children in India	Rajani Paranjipe
	合評会	1989/9/11	原ひろ子著『ヘアー・インディアンとその世界』について	田中真砂子
	研究会	1989/10/4	スペイン内戦下の女性たち	秋山充子
	研究会	1989/11/17	Women and / in Media	Ann Simonton
	シンポジウム	1989/12/13	お茶の水女子大学留学生懇談会	

	シンポシウム	1989/11/29 ,12/20,199 0/3/19	特定研究「女性のライフコースの多様化と女子大学の役割」	Peggy McIntosh
1990	シンポジウム	1990/4/23, 24	『母性』をめぐる日独シンポジウム	舘かおるほか
(H2)	研究会	1990/5/18	Systematic Planning for Women's in Development and Activities	Barbara Knudson
	研究会	1990/6/14	マレー農村社会における性役割―東南アジアの伝統とイスラム規範のはざまにて	花見槙子
	研究会	1990/6/26	Women's Mothering and Working Roles in Japan and the United States	Brenda Bankart
	研究会	1990/9/25	中央ユーラシア遊牧民の歴史にみる女性像	宮脇淳子
	研究会	1990/10/23	福沢諭吉の女性論	杉原名穂子
	研究会	1990/11/22	日本近代女性の自伝を読む	Ronald P. Loftus
	研究会	1990/12/5	精神的母性	Elisabeth Gössmann
	研究会	1991/3/13	女性の自然科学研究者の進路決定要因の研究について	ビヴァリー・ゲッツイ
1991	研究会	1991/5/29	大正時代の『令女会』の歌曲―女学生の歌唱と女学生向け創作歌曲の一考察	坂本麻実子
(H3)	研究会	1991/6/10	An Anthropological Study of Gender Science in Japan & U.S.	Sharon Traweek
	研究会	1991/6/18	To a Safer Place	Dane Raphael
	研究会	1991/10/4	Woman's Movement in Comparative Perspective	Ilse Lenz
	研究会	1991/10/9	Women of the Tlingit Society in Historical Perspective	Frederica de Laguna
	研究会	1991/10/31	Confusionism and Modern Chinese Women's Family Life	黄育馥
	研究会	1991/11/15	フェミニズムの方法としてのメモリーワーク	Frigga Haug パまカン
	研究会	1991/11/19	クリスティヴァ『女の時間』を読む	棚沢直子
	研究会	1991/12/19	The Situation of the Swedish Women Today	Malin Ronnblom
	研究会	1992/1/30	自治体における女性学	粟国千恵子
	研究会	1992/2/12	中国の少数民族における女性	劉耀荃
	研究会	1992/2/20	アメリカ女性学の現段階: 女性学の理論家と県空者養成システム	三宅義子
	研究会	1992/3/13	『女性と労働』日独シンポジウム	
1992	研究会	1992/4/15	Women's Studies in Canada	Naomi Black
(H4)	研究会	1992/4/20	Sexuality and Reproduction in Women's Utopian Dystopian Literature	Blaine Martin
	研究会	1992/6/19	湯浅年子博士資料的研究の歩み	松田久子
	研究会	1992/6/22	ジェーン・アダムスの思想と行動	米澤正雄
	研究会	1992/7/20	女性と開発をめぐる諸問題	村松安子
	研究会	1992/10/26	沖縄における女性の就労と性役割分業観	国吉和子
	講座	1992/11/21 ,28,12/5	次世代育成力を考える	原ひろ子ほか
	研究会	1993/1/28	南インド・ナガラッタールにおける親族・婚姻及び女性	西村祐子
1993	研究会	1993/5/18	中国における職業分化に伴う女性の価値観と行為方式の変化について	沙蓮香
(H5)	研究会	1993/6/24	女性と表彰―"模範嫁"表彰の聞き取り調査をめぐってー	熊澤知子
	研究会	1993/7/16	ベルリンの老人ホームとケア付き集合住宅	大澤真理
	研究会	1993/9/22	女性の自己表現と文学―野上彌生子におけるフェミニズムと形式―	藤田和美
	研究会	1993/10/15	一政治学者のみたジェンダー研究―オリエンタリズムとの関連―	石田雄

	特定研究想 1993/11/13 Women in Higher Education—A case of the University of California USA— 談会		Women in Higher Education — A case of the University of California USA —	Dr.Maresi Nerad
	研究会	1993/11/14	変容する男性社会―労働、ジェンダーの日独比較	高島道枝ほか
	研究会	1993/12/3 Gender, Justice and Therapy: Can One Be a Feminist and Practise Family Therapy?		Jan McDowell
	シンポシウム	1993/12/14 ,15	女性とメディア	
	シンポシウム	1994/1/20	特定研究「ライフコースの多様化の時代における大学教育と女性」	
1994	研究会/シンポ	1994/4/7	エコロジーとフェミニズムを考える	Maria Mies ほか
(H6)	研究会	1994/6/1	オーストラリア女性史研究―女性史からフェミニスト史へ	Vera Mackie
	研究会	1994/7/27	いけ花と日本女性:知の発達・地から・ジェンダー	飛田尚弥
	研究会	1994/8/29	Feminist Studies and Qualitative Empirical Methods: the Case of Sex Tourism and Traffic in Women	Ilse Lenz
	研究会	1994/9/27	Internationalization and Gender Relations: Theoretical Approaches	Ilse Lenz
	研究会	1994/10/31	家族法改正をめぐる文献とその論点	海妻径子
	シンポシウム	1994/11/2	学内共同教育研究プロジェクト・大学における女性学及び女性学研究センターの役割について	
	研究会	1995/1/27	How to combine Parenthood and Work?—Policies on Gender in Sweden—	Rita Liljestrum
	研究会	1995/2/21	Current Trends in Women's Studies in India: Gender, Development and Empowerment/	Malavika Karlekar ほか
	研究会	1995/3/1	Women, Education, and Development in Bangladesh	Saleha Begum
1995	研究会	1995/4/13	日本の女性国会議員―その形成と構造	大海篤子
(H7)	研究会	1995/5/12	姉さん女房の社会学	Ursula Richter
	研究会	1995/6/16	女性と政治	Elic Plutzer
	研究会	1995/7/3	遺伝子とジェンダー	Joan Hideko Fujimura
	研究会	1995/9/18	アメリカのフェミニスト法理論の現在	Frances Olsen
	研究会	1995/10/13	社会主義フェミニズムの観点から見る『雁』	玉枝 Prindle
	研究会	1995/11/24	エコロジーとフェミニズム	山本良一
	シンポシウム	1995/12/2	湯浅年子メモリアルカンファレンス―エレーヌ・ランジュヴァン・ジョリオをむ かえて	Hélène Langevin-Joliot
	研究会	1995/12/19	The place of women in Egyptian Society	Samia Khedr Saleh
	研究会	1996/2/14	ネパールにおける Management と WID の視点	福士恵理香
	研究会/シンポ	1996/3/19	日本の学問研究とジェンダー	舘かおる

【資料】⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則

(平成27年3月25日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構規則第4条第2項の 規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下「研究所」という。)に関し必要な事項を定め る。

(目的)

第2条 研究所は、グローバル女性リーダー育成研究機構に附属する研究所として、ジェンダーに関する総合的、国際的な研究及び調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資することを目的とする。

(研究及び業務)

第3条 研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる研究及び業務を行う。

- (1) ジェンダーに関する国際的研究及び調査
- (2) ジェンダー研究に関する教育研修
- (3) ジェンダー研究に関する文献・資料の収集および整理
- (4) ジェンダー研究に関する情報の提供
- (5) その他前条の目的を達成するために必要な業務

(組織)

第4条 研究所は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 研究所長
- (2) 教員
- (3) 研究員
- (4) その他学長が必要と認めた職員
- 2 研究所に、次に掲げる者を加えることができる。
- (1) 副研究所長
- (2) 特別招聘教授
- (3) 特任職員
- (4) 客員研究員
- (5) 研究協力員

(研究所長)

- 第 5 条 研究所長は、男女共同参画を担当する副学長並びに基幹研究院人文科学系、人間科学系及び自然科学系の系会議構成員(以下「系会議構成員」という。)である教授のうちから学長が任命する。
- 2 研究所長は、研究所の業務を掌理する。
- 3 研究所長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 4 研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(副研究所長)

第6条 副研究所長は、系会議構成員のうちから、研究所長が指名する。

- 2 副研究所長は、研究所長から指定された業務を掌理する。
- 3 副研究所長の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。
- 4 副研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(研究員)

第7条 研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に従事する。

- 2 研究員は、基幹研究院に所属する教員のうちから、学長が任命する。
- 3 研究員の任期は 2 年とし、その終期が研究員となる日の属する年度の翌年度の末日を超えることとなる場合は、翌年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第8条 客員研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に参画する。

- 2 客員研究員は、本学専任の教員以外の者を、学長が委嘱する。
- 3 客員研究員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(研究協力員)

第9条 研究協力員は、第3条に掲げる研究及び業務に協力する。

- 2 研究協力員は、本学専任の教員以外の者を、研究所長が委嘱する。
- 3 研究協力員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(運営会議)

第 10 条 研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、ジェンダー研究所運営会議 (以下「運営会議」という。)を置く。

- 2 運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。
- (1) 研究所長
- (2) 副研究所長
- (3) 第4条第1項第2号に掲げる教員
- (4) 第4条第1項第3号に掲げる研究員のうちからグローバル女性リーダー育成研究機構長(以下「研究機構長」という。)が指名する者
- (5) その他研究機構長が必要と認めた者
- 3 運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。
- 4 運営会議の構成員は、第2条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。
- 5 研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。
- 6 本条に定めるほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 研究所の事務は、企画戦略課が行う。

(雑則)

第12条 この規則に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附則

- 1 この規則は、平成27年4月1日から施行する。
- 2 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究センター規則は、廃止する。

附則

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

附則

この規則は、令和4年4月1日から施行する。

【資料】⑧『ジェンダー研究』編集方針・投稿規定

《編集方針》

- 1. 『ジェンダー研究』(以下、本誌)は、学際的・国際的なジェンダーに関する最新の研究成果を発信し、グローバルなジェンダー研究の発展に寄与する。
- 2. 本誌は、特集記事・投稿論文・書評からなる。
- 3. 本誌は特集記事を企画し、時宜にかなったもの、国際的な関心の高いもの、新領域を開拓するものなど、現在のジェンダー研究にとって重要であるテーマで、質の高い論文を掲載する。
- 4. 投稿論文は、国内外・学内外を問わず公募し、厳正な審査を経て掲載することで、質の高い学術論文の国内外への頒布を進める。
- 5. 書評は、国内外のジェンダーに関する書籍を厳選し、最先端の研究動向の紹介およびそれについての考察を加えた論評を行う。
- 6. 本誌の刊行により、国内外・学内外のジェンダーに関する研究の発展を促進し、グローバルかつ有機的な研究交流の構築を目指す。そして、国立大学法人として、男女共同参画社会の実現に貢献する等の、社会的要請にも応える。

《投稿規定》

- 1 投稿する論文は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。
- 2 投稿者は、国内外を問わず、学際的に女性学・ジェンダーに関する研究に従事する、原則として修士号取得相当以上とする。
- 3 投稿する論文は、未発表の論文に限る。なお、この規程に違反した場合、新たな投稿を受け付けないなど、しかるべき措置をとる。
- 4 論文執筆における使用言語は、原則として日本語または英語とする。日本語/英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。
- 5 投稿論文は、
 - ・日本語の論文は、注・図表・参考文献を含めて20000字以内
 - ・英語の論文は、注・図表・参考文献を含めて8500ワード以内
 - ・なお、1 図表 500 字相当、1 ページを要する場合は 1000 字相当とする
 - ・挿図の場合は、1 ページあたり 1000 字、刷り上がり 20 頁内に入ることを原則に、およそ 20 点までとして全体を構成する
 - ・挿図に用いる図版の掲載許可については、投稿者が自らの責任において然るべき手続きをとる。なお許可に要する費用は、投稿者負担とする。
 - *定められた字数などの制限を超えた場合、形式において甚だしく不備がある場合には、受理できない。
- 6 論文の提出時には、本文・図表・参考文献のほかに、以下についても提出すること。
 - 6-1 表紙。論文タイトル(副題も含む)と投稿者氏名・所属を、日本語と英語とで記す。
 - (タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。)
 - 6-2 日本語要旨。400 字以内。
 - 6-3 英語要旨。200 ワード以内。ネイティブチェック済のもの。
 - 6-4キーワード。日本語・英語ともに5語以内で、それぞれの要旨の後に記載する。
 - なお、執筆者を特定するようないかなる情報(謝辞、科研番号)も記載してはいけない。

7 投稿論文は、ジェンダー研究所ウェブサイト上の、以下のいずれかの投稿フォームより、必要事項を入力した うえで、メール添付にて送付すること。

日本語投稿フォーム

https://form.jotform.me/72482244933459

英語投稿フォーム

https://form.jotform.me/72488720633461

- 8 本文と要旨などのテキストのデータは Word と PDF のファイルにし、図、表のデータは Word または Excel と PDF にし、写真は JPEG と PDF のファイルにして提出すること。
- 9 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。その際の費用に関しては投稿者が負担する。
- 10 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める<『ジェンダー研究』執筆要項>に従う。英語の投稿 論文は Style Sheet for *Journal of Gender Studies* とする。
- 11 投稿論文の掲載の可否は、査読者による審査のうえ、編集委員会が決定する。ただし、本投稿規定・執筆 要項や本誌の趣旨に合致しない原稿、また学術的論文としての水準を著しく達していないと判断された場合、 審査の対象外とする場合もある。
- 12 編集委員会は、査読者の審査にもとづき、投稿者に論文の修正を求めることがある。求められた投稿者は、速やかに論文を修正し、修正対応表をつけて、メールにて提出しなければならない。
- 13 投稿者による校正は原則2回までとする。
- 14 投稿後、投稿論文を取り下げる場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。
- 15 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表・写真などが多い場合には、執筆者による自己 負担となることがある。
- 16 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、編集委員会の許可を必要とする。

改訂

- 1.2017年10月27日制定
- 2.2021年5月14日改訂

『ジェンダー研究』web サイト https://www2.igs.ocha.ac.jp/gender/

【資料】⑨ ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー

- 1. 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下、本研究所)ウェブサイトでは本研究所のイベント 開催に際して、イベント参加申込者の個人情報(氏名等により特定の個人を識別できるもの)を、本ウェブページ 上にて収集することがあります。
- 2. 収集した個人情報はイベント開催における会場手配や安全確保、配布資料作成の参考として利用するものであり、本研究所のイベント開催通知以外では利用することはありません。
- 3. 収集した個人情報の管理は、ウェブ担当者が漏洩、紛失、改竄等に対する安全対策を行うことで保護し、その責任は本研究所所長が最終的に負います。
- 4. 本研究所では、プライバシー・ポリシーを改定することがあります。改定する場合は、当ウェブサイトでお知らせします。

附則

このプライバシー・ポリシーは、2015年7月1日から施行します。

国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所(IGS) 2023(令和5)年度事業報告書

編集担当:申琪榮•和田容子

発行: お茶の水女子大学ジェンダー研究所 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 Tel: 03-5978-5846 igsoffice@cc.ocha.ac.jp

https://www2.igs.ocha.ac.jp

2024年7月作成

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

Institute for Gender Studies, Ochanomizu University 2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610 Japan

TEL: 03-5978-5846 FAX: 03-5978-5845 igsoffice@cc.ocha.ac.jp https://www2.igs.ocha.ac.jp

